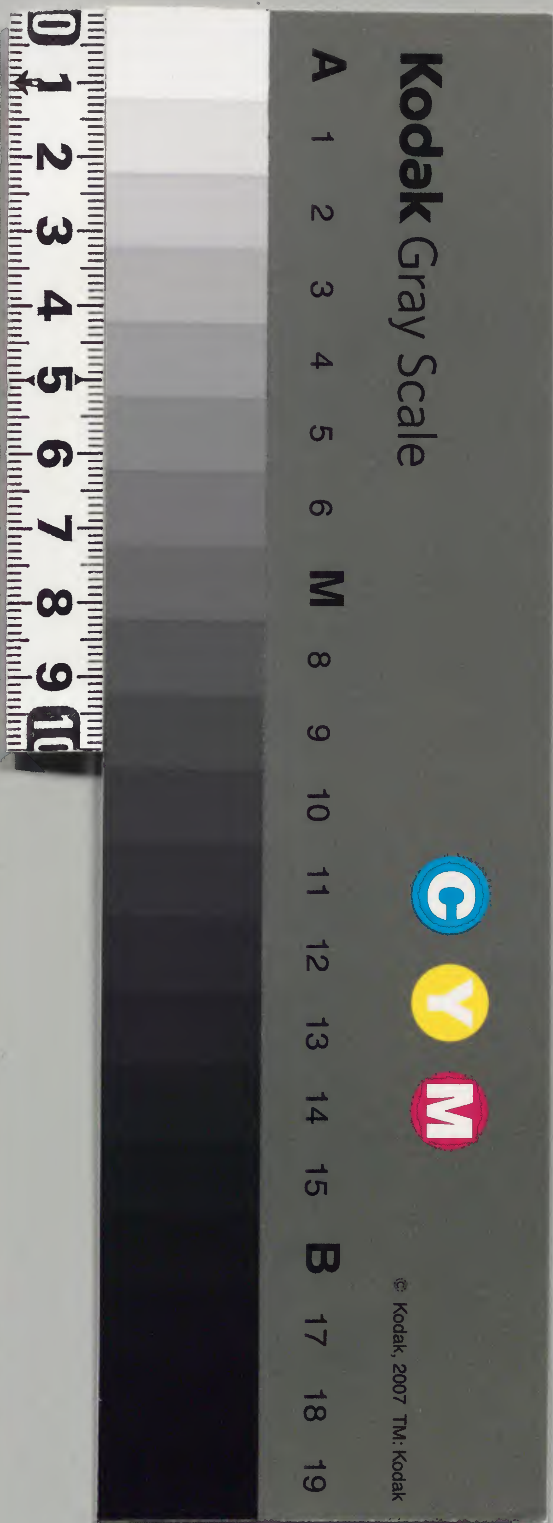


日本書紀傳

十卷  
四

和書  
一〇五二二號

内閣文庫			
番號	和	10522	
冊數	156(30)		
函號	特	85	1





教部省  
文庫印

清印  
文庫印

南正倉  
文庫印

故便以千人所引磐石塞其  
 坂路與伊弉册尊相向而立  
 遂建絶妻之誓時伊弉册尊  
 曰愛也吾夫君言如此者吾  
 當縊殺汝所治國民日將千

内一三六八三號

○日本書紀傳十

○百九十二上



カシラノコニイザナギノミコトスナハチカヘシテノリタマハクウツクシキ  
頭伊弉諾尊乃報之曰愛也  
アガナニモコトウタマハカクハバアレハノリタマキウミテナト  
吾妹言如此者吾則當産日  
ゴトニナイホカシラノヨリテノリタマハクヨリユハカナトリタマフ  
將千五百頭因曰自此莫過  
スナハチアゲタマフソノミツルコシラマラスフナドノカミトナリノマタナゲタマフ  
即投其杖是謂岐神也又投  
ソノミホヒヲコレヲイフナガハノカミトノマタナゲタマフソノ  
其帶是謂長道磐神又投其

ミケシラコレヲイフワツラヒノカミトノマタナゲタマフソノミハカニヲコレヲイフ  
衣是謂煩神又投其禪是謂  
アキグヒノカミトノマタナゲタマフソノミクツラコレヲイフチニキ  
閑嚙神又投其履是謂千敷  
カミトノソノニヨニツヒラサカニレリシサヤイハ  
神其於泉津平坂所塞磐石  
ハノマラスヨミドサヘノオホカミトナリノマタノミアハチ  
是謂泉門塞大神也亦名道  
カヘシノオホカミトモマラスノアルヒイラクイハユルヨモツヒラガカト  
返大神矣或所謂泉津平坂



者不復別有處所但臨死氣

絶之際是之謂歟

便以千人所引磐石名義抄引るも字の如きを和名抄小日本紀云千人可引磐石和名知比と見えたり木乃以之當昔右の所引を可引小作れる本も有ふりけり万葉四五十二小吾戀者千引乃石子七許頸二將繫母神之諸伏と有る此等小依て知毘伎能伊波と訓べし記傳引石ハ知毘伎伊波と訓べし知毘伎能と訓ぬ古言の格ふる有れども名義抄和名抄共小乃と有れば

△ふり古事記引塞とも取塞とも有を考合す可し齊明天皇三年御紀不載石止石順流推引於宮東山有石小推引と云る

容易く致募疏小千人所引磐石謂石之大也と見ゆ措め難うり古事記小五百引石取塞其室戸とも千引石敬乎手末も有皇紀上ハ五百餘人引塞於水門と有し百引石と訓べしふり然れば義を以て千引小千人所引と書れたるハ其字の如く千人として引動うしつ可き程の大磐石と云義ふる者ふり但古事記万葉共小石字を書き名義又靈異記彼船庄百人引石と有る皇紀上ハ五百人引石と有ると有る是ふて頭國と黄泉との堺ふり此意を得て思ふ小坂路ハ境路とふる可し



者不復別有處所但臨死氣  
絶之際是之謂歟

便以千人所引磐石名義抄引るも字の如きを和名  
抄小日本紀云千人可引磐石和名知比と見えたり木乃以之  
當昔右の所引を可引小作れる本も有ふりけり万  
葉四五十一小吾戀者千引乃石乎七許頸二將繫母神之  
諸伏と有る此等小依て知毘伎能伊波と訓べし記傳  
引石ハ知毘伎伊波と訓べし知毘伎能と訓ぬ古言  
の格ふるも有れども名義抄和名抄共小乃と有れば

容易く致募疏小千人所引磐石謂石之大也と見ゆ借  
め難うり致募疏小千人所引磐石謂石之大也と見ゆ借  
古事記小五百引石取塞其室戸とも千引石敬乎末と  
も有傳記上ハ亦最百餘人引塞於水門と有し百引石と訓べして其  
ふり然れば義を以て千引小千人所引と書れたるハ  
其字の如く千人として引動うしつ可き程の大磐石マ  
云義ふる者ふり但古事記万葉共小石字を書き名義  
ハ必伊波と訓べし和名抄共小伊志と訓たりども此  
五百箇磐石の傳を見て知べし〇塞其坂路ハ上小伊  
弊諾尊已到泉津平坂と有を承たるふて古事記小亦  
千引石引其黄泉比良坂と有る是ふて頭國と黄泉マ  
の坂ふり此意を得て思ふ小坂路ハ境路とふる可し

△ふり古事記引  
引るも字の如きを和名  
抄小日本紀云千人可引磐石  
當昔右の所引を可引小作れる本も有ふりけり万  
葉四  
諸伏と有る此等小依て知毘伎能伊波と訓べし  
引石ハ知毘伎伊波と訓べし  
の格ふるも有れども名義抄



臨時祭式行幸時  
祭小塚祭と云有  
り又舊宮送塚神  
祭云石菴宮入  
却送神と有る塚  
神も此事小成坐  
神守り多事こ  
道郷祭詞講義  
小註をよを見て知

古國郡の境を建らるゝ小坂を以て界と給へるが  
故小姓氏録撰津國皇別小坂合部連大彥命之後也允恭天  
皇御世造立國境之標因賜姓坂合部連と有が如く境  
小坂合の字を書き事常ふり然れが此ハ泉津平坂と  
伊賦夜坂との坂合ふて其穴の入口ふる者ふり万葉  
六丁二十小大王之界賜跡山守居と有る界も此よりハ  
我地とトたる由ふり此より轉りて必坂と坂との合  
るを何れも塚と坂路ハ又佐加傳とも訓べし万葉十  
三四小鳥網張坂手乎過と有ハ神名式小大和國十市  
郡坂門神社有る其ふて此ハ坂地名小ハ有れども元其

坂路小依れるふゝむを又如此く坂門と書る門ハ水  
門海門ふどの門ふて内より外小出る所を云るふれ  
バ坂門も其意ふる可く下小其於泉津平坂所塞磐石  
是謂泉門塞大神と有る泉門即此坂路小當るを思ふ  
小此ハ泉津平坂の坂合門ふる者ふり常ハ道の  
葉小道之長手と云ひ又繩手又道の行手ふども云れは  
傳をも其心耳ふめりと思ひくを此ハ門の轉小こる  
有け○塞ハ古事記小千引石引塞其黃泉比良と見え  
又下小ハ五百引右取塞其室戸と有る塞と同く佐  
閑氏と訓べし記傳小佐閑ハ令障サウふりと有り神功皇  
后御紀小大磐塞之不得穿溝と有も磐の塞れる例ふ



△瑞珠盟約章第  
一書小相對而立  
折言曰云々有小同  
古事記小其石置  
中各對立而有  
を此ハ文を切テ  
る者ハ雄ノ天  
皇ノ神紀太子ノ放影  
媛袖後廻向前立  
云々モ見レ也

武烈

り今亦ハ布伎賀理氏ノ訓モ其モ悪クぬレ也モ猶此  
も佐夜理氏ノ訓ベシ諸右ノ引塞也取塞ノ引モ取  
も千引云ひ五百引云如ク私記ハ塞其坂路を是  
小人の手ヲて物爲る由ハふり也私記ハ塞其坂路を是  
舉與中國與黃泉不得相通之始也と有り記傳六九十小  
如是爲て追來坐る女神を禦ぎ留奉給ふふりと有る  
此時ハ別處を度し給へるより彼國と此國ノ相通ハ  
ず成れりしふり下ふる泉門塞大神の傳を見て知べ  
し○相向而立公記傳六九十小各對立而ハ阿比牟伎  
多ク志氏と訓べし万葉八三十小天漢相向立而又伊  
奈牟之呂河向立ふと有レ也ハ依て姑く而立を上下  
小置替て訓む心ハ在ベシ然レゞレば尋常の漢讀の

狀ハふりて卑しげふり右の千人所引磐石を中ハ置  
り古事記御宇氣比段ハ各中置天安河隔てレ西方ハ立合給へるハ  
而宇氣布と有る事ノ狀をも思ふ可シ○絶妻之折言第  
七一書ハ此云許等度と注されたり也諸此ハ義を以て  
書れたる字ハふり古事記ハ度事ハ有り其ハ借字  
ふれば義ハ預レず若て許等度と云ふ言義ハ別處ト  
云事ハて顯國と黃泉と相通不事を断て別處ト爲ス  
ふり其始鎮火祭詞ハ吾名妹能命波上津國ハ所知食  
倍志吾波下津國ハ所知止申ハ石隱給ハ云々と有れど  
も其時ハ女神より然申させ給ふ事ノ有レ耳ハて男  
神ノ諾ヒ許シ給へるハも非りし故ハ黃泉國迄モ追



竟  
△五與汝所作之國  
未作意故可還  
之宣ひ入て

比  
△古事記御宇と氣  
此段小是後所生云  
故自吾子也先所  
生云故乃汝子也如  
此詔別也と有る詔  
別小同く

往坐て△此去くの事有りるが己小往見坐る小実小不  
須也凶目醜めき汚穢き國ふりければ逃返坐つる小  
女神の御怒坐て如此く追奉らせ給へる小依て殆小  
親族離れむと所思す御心も出来又長く其國の往來  
を一向小留め給ひむと所思し成て先の女神の御言  
小對へて汝ハ下津國を所知せ吾ハ上津國を所知む  
と云事を言簡小別處を度すと詔給へる小て△其即族  
離る小て有り御妹妓の御睦びも解たるふれば許  
等度と云小ハ猶絶妻之折言の字小ても義を盡せりと  
ハ云べりゝざる者ふり  
記傳小書紀一書小伊弉諾尊  
盟之曰族離又曰不負於族

有る是事戸の御辞小や借次小次掃之神号泉津事解  
之男と有るを思ふ小事戸ハ事解言の約れり小や有む  
と有ハ此ハ右小引る鎮火祭詞の結ふる事を思漏さ  
れたるふり舊事記小ハ紀記のニ文を相聯合せて  
建絶妻之誓渡其事戸セ有ハ拙き事小て彼紀の例此  
をも捨ず彼をも捨ず物爲るふり然るを彼紀を據と  
して或痴者妄説を作云るも有れども取小も足ざる  
事ふれば今云辨る小及ハず又事戸の戸を男女の陰  
ふり云如き  
ハ殊小幼雅雅○建ハ私記小問何故建為度哉答案古  
事記曰度事戸故今尋彼文而讀之度者猶如言度言絶  
断夫妻之交也古本云古止多知支但先師依古事記  
也と有れば中古小古事記小依て建を度の如く讀り  
る者ありけり記傳六ニナ小も右の説を引て今俗言  
小人小受持しむ可き事を言附るを申渡すと云ふ能



似たりと云れたる実不然る事ふれども又建を字の  
 如く訓むも悪く然るハ泉津平坂を境と定め  
 て此より上津國下津國と別く爲るを南別處と  
 云ふれば其境を定むるを建と云ふるなり然れば古  
 事記ふるハ言度了意て此の凡ての御言ハ係り此  
 の建るハ其磐石の塞て別處不爲るを云ふり斯れば  
 度と建とハ各別ふる義ふるを此を一小訓ハ強事ふ  
 る可一万葉十九六玉梓之道尔出立往吾者君之事跡  
 越中國より京上る時一有を引て記傳ハ此歌家持御  
 持て行ひ詠る一離別の辞を云て其を忘れず心  
 も此の如く別處一君之事跡ハ我より先の人

を別處と云ふ一君が處を負持て行ひ云が歌の  
 興ふる可一詞書ハ門前之林中預設饌餞之宴と有を  
 以考ふ可一但上代ハ此の故事より引て  
 離別の辞を事跡と云けむ事云も更ふり  
 記傳ハ愛を宇都久斯伎で訓れたるハ從ふ可一宇流  
 波斯と讀む事ハ上一六丁ハ云り齋明天皇四年御紀大  
 御歌ハ于都俱之枳倭柯枳古弘と見え万葉五七妻  
 子美禮婆米具斯宇都久志二十三丁ハ有都久志波一  
 尔又九三丁宇都久之氣麻古我糸波奈禮又四丁宇都久  
 之美ふど有り又愛字を宇流波斯と訓る外ハ宇都久  
 斯と訓たるも多在り三ハ愛人纏而師四ハ羈行君子  
 者又愛常吾念情十一一ハ山隔愛味隔有鴨又愛等思篇  
 来師十九一ハ愛吾妻離流ふどの愛を皆宇都久斯と訓



り故其字都久斯ハ伊都久斯ハ同トクテ懇切ハ傳  
ク意ふる可ク万葉七四五トハ伊波比孀ト云ハ九三四ト  
ハ錦綾之中ハ畏有齋兒毛ト有ふトを合せて考ふ可  
かり又源氏物語ハ伊都久斯伎ト云語有を注ハ龍字  
を當たるも此ハ字都久斯伎ハ愛字を書れざるも相  
通ひて同トクを名義抄ハ龍を字都久斯年ト讀たる  
以其同言ふるを知ベク神を伊都久ト云ハ神ハ傳  
葉ハ五ハ虚見通倭國者皇神能伊都久志吉國ト有ハ  
皇神の持傳ク國ト云事ハ然レハ字都久斯ハ愛  
字允當レリ然リト雖モ字流波斯ハ愛字を書ク時  
ハ語ハ其差異無ガ如クふレども二共ハ語の本ト  
説分テ見ル時ハ上ト云ル如ク字流波斯ハ得愛字都  
久斯ハ齋爲トて同トクト云ル如ク字流波斯ハ得愛字都

合可カク如クふレども  
然男神の御方より  
旗離レト言度  
給へるを今更の如  
ク思ハレ成テ言  
者此者云々直へる  
者

○言如此者ハ古事記ハ爲如此者ト有テ其ハ千引  
石を中ハ置テ引塞給ハ御所爲ハ係ルハ此ハ男神の  
詔給へる御言を承テ言如此者ト宣へるふト此  
ハ其承たる御言見えズ右の建絶妻之誓ハ字の趣  
ハ然る事ふレとも言義を以云時ハ磐以テ其坂路を  
塞テ別處を建給へる由トて此ハ鎮火祭詞の結ふる  
事右ト云ル如クふレども其ハ本より女神の御心ト  
テ有レバ言如此者ト云程の事トてハ非ルハ古事  
度事ト有ルハ其言度ハ給ハ時ハ御言有ハ趣ハ  
るを此ト建ト有ハ右の度トハ同義ハ事ト右ト  
云ルガ如クふレバ言如此者ト記傳六トハ旗離又ト不負  
此者ト係合トる者ト云ル



合見三四大伴坂上  
即女怨恨歌  
般名破神或將離  
空輝乃人歟禁良  
武ふ

於旗云々此事戸の御辞ふやと云れたる実小然る言  
ふり然るバ此小右文必有べきを然るぬハ建絶妻之  
誓之字小見ハして其事ハ下ふる第十一書小盟之曰  
と有る所へ譲られたる者ふりけり其文小不直黙歸  
而盟之曰旗離又曰不負於旗乃所唾之神號曰速玉之  
男次掃之神泉津事號之男紳號九二神矣と有る此旗離  
を男神泉津小附て旗波那禮武と訓來る事ふれども其小  
てハ事解之男神小相叶ハず旗佐加禮と言度ハ給へ  
るふ二二ひ泉津事解と云事ふりけれバ予ハ然訓つ万葉  
二二丁 天皇崩時婦人作歌サカ小離居而朝ハ嘆君放居而

吾恋君と有か如く生たる死たるを云ず夫婦の別る  
と事を佐加流と云事常ふり此を以て女神ハ彼國  
小放坐と仰給へり事を知べハ名義抄小離小佐流  
と云訓有も佐久と言同く又万葉十三丁ハ弥遠尔  
里離サカ來奴と云るふ但を始て猶多うり多離字を  
中より此を引出たるハ二卷或本歌小弥遠尔里放來  
奴と有るを見合せ佐せて加ひ理と訓了  
於也波左久禮和和波左可流賀倍又和我目豆麻比等  
波左久禮和和波左可流我倍ふ詠る此有り皆  
離の義不負於旗とハ右の如く誓勝セ給ふ由ふり此  
小依て成坐る神を速玉之男神と申すも折言小勝セ御  
在る坐由小て此玉ハ御魂を申せるふり次小泉津事



解之男の解ハ古く佐加と訓る其正訓あり万葉十三  
三十四丁ハ琴酒者國ハ放嘗別遊者家ハ離乾坤之神之恨  
之草枕也覇之氣ハ妻可離哉と有る琴酒ハ借字小テ  
事離コトサテふり次ふるコトサテ遊コトサテも同句を對コトサテ置コトサテて下ハ放コトサテふコトサテ離コトサテ  
ふコトサテひコトサテとコトサテふコトサテて此ハ旅ハ行コトサテたる人コトサテの七コトサテふコトサテどコトサテけコトサテるコトサテ事コトサテ  
離コトサテと云るふり此を以て事解と申すも其意ふるを知  
る時ハ旗離も旗佐加禮と女神の方ハ附て仰給へる  
事知らるるふり如此ハ女神へ附て旗離と宣ひ御自  
ハ附て不負於旗と宣へるが謂ゆる折言妻之折言ふるを  
女神の猶懲コトサテ下コトサテふ言如此者と又云返コトサテ給へる者ふ

るふり此ハ第十一書ハ就て云べき事ふれども此ハ  
戸の御辞ハ但事解之男の解を登コトサテ祈コトサテと訓て事ハ解  
言の約りし語ハ有コトサテむと云れたるハ誤ふる事右  
ハ野コトサテ從コトサテ出コトサテ流コトサテ水コトサテと有コトサテハ發コトサテ語コトサテハ此コトサテの事離コトサテハ異コトサテハ  
別酒を押コトサテ出コトサテすコトサテと云ふ續コトサテけコトサテふりコトサテ當コトサテ時コトサテ常コトサテハ用コトサテふる清酒  
ハ對コトサテてコトサテ解コトサテの例コトサテハ非コトサテず○汝所知國ハ此頭國を云  
ふり古事記ハ汝國と有り鎮火祭詞ハ吾名妹能命  
波上津國ハ所知食志又吾名妹能命所知食上津國ハ  
云くと有る是ふり偕此頭國ハ伊弉諾尊伊弉册  
尊二神相並給ひて生坐コトサテ國コトサテふるを如此くコトサテ位コトサテげコトサテ宣  
ふ事ハコトサテも甚コトサテと不審コトサテき事コトサテの如コトサテくコトサテふれどもコトサテ己コトサテハ吾



波下津國宇所知年年と申させ給へるを今此に至て別處を建て其相通ふ事を断給へるふれは其より八泉國ハ女神の國にして頭國ハ男神の御成たる故ハ汝所治國神ハ宣へるふり然れば汝所治ハ此小てハ汝將治の意ふれば志良佐年と訓べし此迄ニ神小て所知者ハ國の始テ男神ハ屬ク事ふる故ふれハ古事記御天降段ハ天照太御神之命以云ク此葦原中國者我御子之所知國也有ハ未知者ざりし前ふる故小志良佐年と云と同一訓様ふり八洲起元章弟一書ハ天神謂伊弉諾尊伊弉冉尊曰有豐葦原千五百秋瑞穗之地曰汝往循之と有ガ如ク此國土を循テ御事ハも皇祖天神の大御命小依で給へるふて形の如ク國土ハ生成し

給へりしうども女神ハ得たぬ事小依て泉國へ往坐し故ハ古事記ハ伊弉那岐命語詔之愛我那迹妹命吾與汝所作之國未作竟故可還と宣ひ入たる事有り然れども天神の預て相成し給ふ御所爲ハや依れりけむ如此く別處を建給ひし故ハ此より此國を修理固成テ事ハ伊弉諾大神の御事業ふるガ故ハ汝國と宣ひ又汝所治國ハ宣ふ小至れりし者ふり又此ハ又止事を得さる幽深き致有る事ふり其ハ下小説ベ  
室劔出現章第六一書ハ天大己貴命與女彥名命カ心經營天下と有る古事記ふる神產巢日御祖命の御言ハ故與女葦原色許男命爲兄弟而作堅其國と有る御命を蒙坐るふる小女彥名命ハ終ハ常世郷



小至坐しうバ大己貴命一柱して此國を經營坐る事  
ど似たる事ふり此等の事ハ皆天神の然有しゆ給へ  
る事其文小就て説む ○民ハ古事記小人草と有る依  
をも考合せ見べし ○民ハ古事記小人草と有る依  
て訓べし舊訓然り傳ハハ十小云り○千頭ハ古事記  
も此小同ト記傳六 一十小千人と云べきを如此詔ふ  
ハ絞小就たる言ふり同ト事を次ハ千人死と云る  
小合せて思ふ可しと有ハ然る言ふるを此ハ産る方  
をも千五百頭と有を思ふ小用ひ方異ふて人を計ふ  
る小幾頭と云事の舊くも有けるを被用たるふめり  
西戎小も然りと見えて彼古ト謂ゆる三皇の中ふる  
人皇氏の事を九頭と云るハ九人と云事ふて其分身  
九神ふりしを云る ○縊殺ハ息の根を断む云事して唯死する  
ふて此小似たり

△古事記小千五百  
人の生る事  
立千五百産屋を  
云て同ト例ふて  
唯死と云ふ事を  
其死及ぶ所の  
事を以て宣へる  
者ふり

ハ絞と共ふ名義抄ふ久毘理又久毘流と訓れ字鏡小  
縊絞也經也久比留と有て頸を絞る事ふるが頸を絞  
る時ハ氣息の往来絶るを以て斃る此即殺すふり其  
ハ死ミスも氣シス去スて息の絶小通ハざる名義小思准へ  
て曉る可し然れば此を強小縊殺の字小泥ニて説べ  
し小非るふり人の死るや其壽を保たる其ハ天年を  
終ハふれば別ふして或ハ饑寒小依り或ハ水火小災せ  
られ或ハ鎗刀小刺れ或ハ矢折ツクせるふて神の殺して  
氣息を絶給へる御所爲小係る事ふる故小縊殺とハ  
申させ給へるふり古事記ハ絞殺千頭と有を承て



下ハ千人死マ有を以知ベシ記傳ハ絞ハ西戎漢代  
周礼ハ磔ト云モ此ナリの死刑の中ハ有テ  
甚上代ハ人を殺スハ專絞リハ絞殺ト有ハ  
ルモ然ル心ハ宣ヘシハ絞ハ轉伏為ナリ此語万葉  
ニハ非事方云云如シハ轉伏為ナリ此語万葉  
ニ立者云ク許呂卧者云ク立不對ヘテ轉伏コト  
云ヒ又浪音乃茂濱邊乎敷妙乃枕尔為而荒床  
自伏君之コト有ハ人の死テ仕レタルを云るナリ故思  
ふ小許呂須ハ立タル身を轉伏リハ絞起ル柀ナ  
リ字ハ殺トモ誅トモ戮トモ弑トモ戕トモ刑ト  
ども許呂須ト云ふ種ハ物ハ依テ書別事ハ有レ  
語の本ハ轉為ナリ報之曰ハ加閉志氏能理多麻波  
久ト訓ベシ女神の御言ハ打勝テ云返シ給ヘるナレ

ハ其心甚劇シハ其けれバ許多閑氏返其ふデテハ訓ベクナ  
古事記神字禮豆久段誼戸有返天孫降臨章ト此ト同ト  
意不見る可ク瑞珠盟約章報命の字を復命の如ク  
用レタルを以テ報ハ加閉須ト云訓モ有を曉リぬ  
今も俗ハ人の云詞を承ズシ我思ハ心を述  
ルモ詞を返すと云ハ此ハ當レリ唯人の云詞を承  
小尋常ハ答ふ言如此者古事記ハ汝為然者ト有  
リ其ハ彼絞殺千頭ト有る御所為を指テ云るふるを  
此ハ同ト事ハ吾當縊殺汝所治國民日將千頭ト  
有る指當リテの御言を承テ言如此者ト宣るナリ因  
備古事記ハ上ハ為如此者ト有テ此ハ為然者ト見エ  
タル如ク然ト相對ヒテ実ハ妙ナリ記傳ハ加久



ハ我ハ属たる事又指當りたる事を指て云ひ志加ハ  
向ふ人又向ふ物ハ属たる事又其言事ふどを指云て  
此と其との差別の如く文章ハ上を  
兼て云ふも此差異有りとの有が如く○吾則ハ古事記  
ハ此を吾一日云くと有を記傳ハ阿禮波夜と訓べ  
此ハ白檮原宮段大御歌ハ和禮波夜惠奴と有る語勢  
ハ似たればふりとの有ハ倣ふ可く吾者と云て下ハ詔  
ゆる歎息の夜の辞の添たるふて此ふて深く所思  
入給へる御有意見えたり景行天皇御紀ハ日本武尊  
三歎而曰吾孀者耶と有る  
趣をも考合せて波夜  
の語意を思ふ可く○日將ハ日許登ルと訓べハ本  
ハ上ふるも此登此ルと訓る其ハ古事記  
ハ一日と書るハ合ふ可けれども万葉十四下ハ日

△古事記ハ一  
五百人生也と有る  
是なり

毎聞跡と見え等由氣宮儀式帳ハ天照坐皇太神乃朝  
乃大御饌夕乃大御饌日別供奉と有れば古言ふり世  
古學者斯る所を比ル禊ハ日の来經ハ就て云ふれば常  
ハ固陋ふり此ハ禊ハ日の来經ハ就て云ふれば常  
住不斷の事を比基登と云ハ別ふり毎年○千五百  
毎月毎日毎夜ふり年別月別日別夜別ふり○千五百  
頭千五百ハ此ふてハ千五百秋瑞穂國又千五百之黄  
泉軍の如きとハ違ひて限れる數の如く非も見ゆれど  
も然ハ非る事下ハ云を見て辨ふ可く偕古事記ハ此  
を立千五百産屋と有ハ甚愛た其ハ千頭絞殺給ハ  
バ千五百の産屋を建むと云事ハ其産屋ハ猶幾  
人も生副つ可き事を知せたる者ふり記傳六二三ハ



今唯小産屋ハハ詔ハて立産屋ハも詔ハるハ上代  
の言小子を生を然云習ハハけむ榮花物語振合卷小  
大將殿も女御の御産屋四月ふる小今二月三月を過  
させ給ハハず成ぬる甚ハく口惜く思ハく歎く云く此も  
御産の事を御産屋ハ云ハりハ見えたり上ハ死る事を  
承て生るハ事を右の如く立産屋ハ宜へる御言の  
御趣天然小文章を成して愛して申すも中ハふり○  
古事記ハ右の文を兼て其結び小是以一日必千人死  
一日必千五百年生也ハ云十七字有ハ右の古傳ハ微  
して甚ハ上代より詔継ハ言継来る古説ハ今云  
べハ一日云く一日云くハ日別云くハ云ハが如く俗小

毎日ハ云事ハふり千人五百人ハ記傳六ニハ知  
比登伊富比登ハ訓べハ九て人の數を比登理布多理  
ふハ云古言ふれど多ハを云ハハ神武天皇御記歌小  
愛弥詩鳥毘儂利毛ハ那比若ハ有ハ如ハ若于比登ハ  
づ云けむ然れハ書記小醜女八人又畠仁天皇御卷小  
壹佰人ハふハ有ハ訓ハも古ハる可ハ略ハと有ハり然れども  
古事記白檮原宮段歌小阿米都ハ知杼理麻斯登ハ  
有ハ大久米命の雄偉ハ狀ハを見て天地千人ハ増人  
と云ハて此ハハ上ハふると同御世ハふる小知杼理と云  
て知陀理の義ハふり故思ふ小體ハりたる事ハハ其幾比



登と云い其ハ計ふとハ非ぬども其用ハ就て云時  
ハ幾多理と云けめ此ハ唯大凡を云故ハ知此  
登知伊富比登の訓允ハ當れり諸神武天皇御紀ハ  
事記高津宮段歌ハ比登理と有リ又獨字を比登理と  
訓ハ多理を登理とも云ふリ右の千人を知栢理と  
有を以知べし又仁徳天皇御紀歌ハ赴(多)駄利又夜櫛  
刃ふとんて人を擧ぐる多理ハ器物を計ふるハ一具  
二具ふとんて人を擧ぐる多理ハ器物を計ふるハ一具  
足魂神の講義ハ委しく注せるを考ふ可く死ハ息を  
かり雄略天皇御紀歌ハ伊能致志儺磨志と有れハ死  
の字音ハ非ず上ふる風神の傳ハ註る如く命活も死も  
息の有無ハ係りて命ハ息内イキふり活ハ息来イキて氣の  
往来ハ間を云ふり死ハ息去イキて氣の往来ハ成イキ

るを云ふり上ハ縊殺と有る下ハ云る事を考合す可  
く生ハ被産ウマふり此意傳六ヤ丁產生の傳ハ云り諸千  
人五百人ハ本より限れる數ハ非る物々但人草  
を縊殺さむと云てハ其程の辨ハ難事なる故ハ先  
標を定めて千頭マ宣へる其ハ言勝て弥千弥百マ云  
返ハ給へるふるを後世ハ其信違ハざるハ依ヨて千人  
死して千五百人生るとふり所以ハ大被詞ハ國中  
ハ成出武天之益人等と見え第十一書ふる天照太  
神の大御命ハ頭見蒼生と詔給へるふとを合せて伊  
弉諾大神の不負於族と宣給ひて誓言を報く給へる



御言の幸し云へば不得云ふ絶たる御事ふりく代神  
の傳説の多在る中ハ夷ハ蠻の末國ハ其程ハ  
小形計の傳ハ遺れるも有る此古傳ハ萬國の人  
の且て夢ハ得知ぬ事ふり彼幽明の故を原ぬ死生  
の理を云ふと皆後人の推量ハ云ふも是ぬ者不  
り神ふぬ人の争て測知る事ふめハ其小就  
ても斯る古説の今眼前ハ神の御言を受賜るガ如く  
皇御孫尊の貴き御蔭ふる者ふり然れども右の如く  
小てハ伊弉冉大神ハも惡神の如く見ゆめれど然  
小ハ非ず此ハ寔ハ幽深き致有り今其曠を解ハ  
第十一書ハ伊弉冉尊の泉守道者を以て令白給へる  
其御言ハ吾與汝己生國矣奈何更求生乎吾則當留此  
國不可共去云々と有る此時ハ伊弉諾尊聞而善之散

去矣と見えたる此小て善ハも御心緒の程見ハれ  
たり抑二柱神相婚坐る事ハ本より皇祖天神の詔命  
小依れるを今如此別處を建て族離給へるハ此も亦  
皇祖天神の御心と伺知れたり人草を始て萬物  
の形質を備へて性命を世ニ存ス其本因ハも風神  
大神火金神水神土神の親魂合て相結成給へる物ハ  
るガ風火ハ氣ふり靈ふり金水土ハ其身ふり然るハ  
風神ハ伊弉諾尊の御氣ハ成坐ハ火神ハ女神の生成  
給ふと雖も心惡子と詔ひ放たれハ此二神ハ伊弉諾  
尊ハ属奉る可キ理ふる故ハ風火の性上ハ向て下り



△大同類聚方卷二  
 章小比登乃美乃  
 奈連流半自免  
 波安萬都美他  
 麻美豆保乃計  
 乃不多通乎加波  
 世云々奈流と有  
 りて

ず金神水神土神ハ其女神小屬て成坐る神等ふり此  
小依て金水土の性下小沈みて上小浮ハズ其風火の  
 降り金水土の昇る者ハ互小相結バリ合小依れる所  
小して地上小形體を爲す所由是ふり△此即上津國下  
 津國小別處を建て御在し坐つても相保有セ給ふ所  
ふり万葉十一丁七ノ千早ハヤフル根神持在命ノ有ハ此小當れ  
り上ス命乃美已止仁古ニ阿波ノ萬乃保乃計都知美  
 味豆阿治予奈伽和太仁伊連伊太須古登乃太要邦流  
 乎都倭止之底と有る天の火氣と土水を以て身を存  
る由ふり然る小伊弉諾尊ハ天小坐て頻小引御在し  
 坐し伊弉冉尊も泉小坐て復引御在し坐すも男神の

御徳盛ふれば活き女神の御威強ければ死ぬめり万  
 葉二三丁ノ近江大津宮天皇崩時婦人作歌小空蟬師神  
 尔不勝者云々詠る是ふり又十一ハ丁ノ小靈治波布  
 神も吾者打棄七四惠也壽之惜無と有ハ神ノ保ハセ  
 給ふ身か有れども壽の惜くず成ぬるハ神ノ己  
く棄させ給ひけむとふり又十七五丁ノ造酒歌小奈加  
 等美乃敷刀能里等其等伊比波良倍安賀布伊能知七  
 多我多米尔伊禮と有ハ夜ハ延ハりたる壽を云くと  
 云るふりが如く襖被して其壽の延ハると云ハ死  
 ハ泉小属たる事ふりが故ふり人ハ限らず草木の  
 末小至る迄も其死生

日本書紀傳十



の理ノ於テ右ニ同シ事ヲ方リ万ノ葉ニ玉ノ葛ノ実ノ不成  
樹ノ波ノ千ノ磐ノ破ノ神ノ曾ノ着ノ常ノ云ノ不成樹ノ別ノ尔ノ有ヲ以テ知ベ  
りキ所以ニ人ノ壯ノ健ノふル時ハ其ノ形上伸ル病ヲ勞ム  
時ハ其ノ體下屈ム風火の下ニ膝ハびズとシ金水土  
の上ニ交ルざるニ依レり其甚ク極ニ至テ氣ハ  
大虚復シ呼吸止ム火ハ天上昇リて其靈ヲ去リ  
身ハ泉下朽テ金水土ハ元ニ復ス此ノ人ノ一生を終  
るニ方リ儲其靈ハ伊弉諾大神ニ從テ奉リ報命して日之  
少宮留ル事瑞珠盟約章説ベけレバ此ハ少云  
耳耳ふリ儲其身死レバ此を土中埋ミて其體ハ伊弉  
冉大神ニ渡リ奉ルふレバ魂も魄も何も行ハ非

△大同類聚方  
あつ黄泉返  
某信濃國人  
須傳方国守奏  
之と有り

れども蘓生の事を黄泉返ふとて其に依て云出  
たりけむ然るハ魂魄（魂）の泉より歸るハ非ず形體の  
復るふてハ有れども何の代よりかう然る僻く（僻）  
説ハ出来れりけむ（此）事己此章の初ニ見ル黄泉の傳  
名義枚ノ魂魄の二字を多麻志比と訓ミ又魂を哀多  
麻志比魄を賣多麻志比と有ル古訓を取て此説を  
成セる故其弟十一一書ハ奈何未生子ヲ申給へルハ  
然る幽深ニ致を聞え給ひく依て男神も此を善給  
へり者方り又其縊殺むと申給ひ將産ム宣へる事  
の極意も此至テ伺知らル事方り然レバ伊弉冉  
大神ハも泉中ニ大坐して有ゆる黄泉を押へ鎮め



て黄泉津大神と大坐乍も伊弉諾大神の神業を助奉  
りて給ひて下津國より此國土人類萬物の全を保有  
せ御在り坐す御事にて実此大神の在りし  
りバ此世ハ絶竟ふより然る辨も無して此大神を  
悪しき神の如く書成し奉り又ハ崩御し狀小説成し  
奉るふどハ皆古人の誤を相傳へ相承たるハ云ふ  
から儲も云甲斐無く頼もけ無き事ふむ有ける  
但如此く成る間の二神の御上小種くの御事共有て  
口ふも言ふも述奉り難き程の御事にて如何計り  
悩ましき御事ふりけむ恐しと申さむも尋常なる御  
事ふりし此を以て思へば皇祖天神の天地を預録  
造りて御業ハも甚もく奇しく○因曰ハ其絶  
妙ふして又高く貴くふむ所思ゆる

妻之誓の御辞を云度し給ひ竟又後其事小就て宣  
ふ事有ふり因と用ひたる例次云々の起を云て因  
以生神云々六所小出たるを考合す可し但此の因  
曰以下ハ右の如くハ伊弉册尊小係たるふれども此  
ハ必然る可し第九一書小有ハ色雷公伊弉諾尊  
驚而走還是時雷等皆起追来云々時伊弉諾尊乃投其  
杖曰自此以還雷不敢来云々見えたる如く泉津醜  
女小宣へるふれハ此小在ハ文の次序違へり此ハ已  
古事記を引て註るが如く噉了更追の下小漏たる傳  
多けれハ其々共小亡たるを右の一書小遺れるハ甚  
尊事ふり又古事記も誤れり御袂段小故放棄御  
杖成坐所成神名衝立船戸神と有も混れり事下小



次云を見 ○自此ハ自此處ふり第九一書ハ自此  
て知べし 以還と有ハ弥委しきふり 借此處も宣へる其處ハ何  
處ふしむと云ハ彼泉門ふり其ハ醜女共泉津平坂よ  
り桃実を採して擲給ひ桃杖を投て自此以還不敢来  
と詔給へるふれハ頭國々泉國々の坂合ふてふりし  
事云も更ふり 古事記白檮原宮段ハ自此於奥方莫使  
ハ幸と有る自此も自此處ふて同じ  
○莫過ハ那須岐曾と訓る其當然の事ふてハ有れど  
も右ハ引る第九一書ハ不敢来と有ハ来名戸と申神  
名の起る所由ふるハ就て思ふハ此も布那斗と申す  
名の起る所由ハ係たる文ふれば莫過と書て布那と

讀べき所ふて有べし但道を経ハ事ハ詞ハ衢ハ謂ハ  
る下二段用言ふれば布流那と云べく又来と云ハ中  
二段活の變格ふれば久流那と云ハ常格ふる神名ハ  
布那斗来名戸と有るハ古言ハ莫經を布那莫来を  
久那と云しふりけり今ハ畿内の方言ハ莫来を久那  
と云計ハ常ハ在り故今布那と此の訓を定めつ 但此  
ハ次  
ハ出せる記傳の説ハ本著たる言ふるが己ハ古史微  
ハ引れたるふも莫過を布那と訓たるハ今按を加へ  
て云説 記傳六 四丁ハ布那斗久那斗の布ハ經久ハ来  
ふり日代宮段美夜受比賣の歌ハ阿良多麻能登斯賀  
伎布禮婆と有る伎布禮婆ハ来經者ふり又阿良多麻



能都伎波伎閉由久の伎閉由久ハ来經行ふり如此く  
来と經とを重ねても云て同意ふるふり畧布と久  
とを合せて云ハ此處を經て来莫々云意ふり云  
神と有ふて此の莫過の義通えたり故思ふり日を計  
意を此登比布多比と云ハ一經二經ふる可く二日三日  
を布都加美都加と云ハ二采三采と云事ふる可くヤ  
但来經の切りて ○杖ハ桃杖ふり次ハ云べし和名枹  
加と云る方ハヤ 行旅具ハ杖和名都惠と有り都ハ古事記ハ於投棄御  
杖所成神名衝立船戸神と有れハ衝ふり惠ハ常ハ杖  
を延陀と訓る外ハ大嘗祭儀ハ推枝者古語所謂志比  
乃和惠と有る此を又大嘗祭式ハ古語として殊更ハ

同トク其訓を註されたるを見ハ當昔己ク言意分難  
うりけし然れども和惠ハ杖字ハ當る古語ふれば  
杖ハ都和惠の略ふる可ク今も梅の豆和惠桃の豆和  
杖の如く伐たるを云ふり其を今迄も未だ杖と云事  
ふしむと思ひしハ心の至り浅りけり借和惠と云  
義如何しても心得難し和惠ハ柔櫓と云事ハ  
音訓共ハ義同くして万葉ハハ玉ハ貫不令消賜良  
牟叔彥子乃宇禮和ハ羅良葉ハ置有白露と有る和  
良ハ柔ふる意ハ和の假字も常ハ夜波と書く事ふれど  
事ハヤ然れハ和の假字も常ハ夜波と書く事ふれど  
も本ハ夜倭ふりハ和の假字も常ハ夜波と書く事ふれど  
ハ和良ハ加ハ氣近ハ真木柱卷ハハふりハ有る河海杖  
ハ和字ハ當て説ハ又真木柱卷ハハふりハ有る河海杖  
ハ無き人ハ有ハ強ハ云事ハ聞ハ然ハハ木杖  
ハ和惠と云ハ幹の強ハ對ハ云ふり杖ハ然ハ柔  
嫩ハ木以て用ハ立ハ非ハ借此ハ桃杖ふり  
本より杖を以て作る故の名と聞ハ

○日本書紀傳十

●二百十一



云ハ弟九、一書ハ雷等皆起追來時道邊有大桃樹故  
 伊弉諾尊隱其樹下因採其實以擲雷者雷等皆退走矣  
 此以用桃避鬼之縁也時伊弉諾尊乃投其杖曰自此以  
 還雷不敢來是謂岐神と有る文を熟見る可し先小有  
 大桃樹と云るを受て其樹下と云ひ其實と云ひ其杖  
事云も更ふるを其用桃と云るも  
 と云るふて其指すハ大桃樹ふるを見合せし知ら  
實杖係れるを以て知ら  
 ばりふり儀式大儺儀又延喜中務省式小以桃弓葺矢  
 桃杖領充儺人と有も追儺ハ此の故事小依れる事所  
 郷祭詞講義小委しく註せるを考合せて曉る可し者  
又諸家の行事ハ桃杖を以て布那斗と云も故有て傳ハれる者  
 かり然れハ此小投其杖と有ハ伊弉諾大神の杖

歩行で御在し坐し御杖ハ非ず桃実を採て擲給へ  
 りしハ雷等の退走り去れる即其桃枝を引折て其  
 杖を泉門小衝立て其鬼共をくして此より此方小經莫  
 と宜ひて其標とハ成給へり衝立船戸神と申せる事事著明者ふり然れハ古  
事記ハ御袂段ハ於投棄御杖云と有て御衣御帶ふ  
ど小並べたるハ誤ふる事愈明く有る者ふり此も  
其々同く絶誓之誓の後ハ出されて伊弉冉尊の御  
上小係て因曰云と有ハ誤ふて古人も此文の錯乱  
をハ能く正し置れざりしを幸ふして弟九一書ハ如  
此く分るし傳りたるふい偉慶る事ふりける  
 ○是謂岐神ハ弟九一書も然り其杖を指て是と云る  
 ふり古事記ハ故於投棄御杖所成神名衝立船戸神と  
 有ハ其物小因て神の成坐るふて御紀の例化爲神と

今弟九一書ハ此云  
 布那斗能加微と  
 有り是謂と書れ  
 たり







相率相口會事無<sup>兵</sup> 下行者下<sup>乎</sup> 守<sup>理</sup> 上往者上<sup>乎</sup> 守<sup>理</sup>  
夜之守日之守<sup>乎</sup> 守奉齋奉<sup>止</sup> 進幣帛者云<sup>と</sup> 有て此  
小ハ久那斗神<sup>と</sup> 所見たり上小引る 記傳小布那斗久  
那斗の布ハ經<sup>フ</sup>久ハ来ふり云<sup>と</sup> 布<sup>と</sup>久<sup>と</sup>を合せて云  
ハ<sup>と</sup>此處を經て来莫<sup>ト</sup>云意ふり斗ハ處ふり此より  
来莫<sup>ト</sup>障留る處小坐神<sup>と</sup>云意ふる可<sup>し</sup>口訣纂疏ふ  
ぞ小此神を道祖神ふり<sup>と</sup>云ひ和名抄小道祖和名佐  
倍乃加美<sup>と</sup>有り佐倍乃加美<sup>と</sup>ハ彼湯津磐村之如<sup>久</sup>  
塞坐<sup>と</sup>有る意ふて塞神ふり<sup>中</sup>又同抄小道神道上祭  
一云道神也和名太無介乃加美<sup>と</sup>有る同<sup>ト</sup>く此神ふ

る可<sup>し</sup>此ハ旅行く人の手向爲る神ふれ<sup>ハ</sup>ふり<sup>採</sup>要<sup>ト</sup>  
有<sup>ガ</sup>如く布那ハ經<sup>フ</sup>莫<sup>ト</sup>久那ハ来<sup>ト</sup>莫<sup>ト</sup>ふて根國底國より  
麓<sup>ビ</sup>疎<sup>ビ</sup>来る妖鬼を禦ぎ過<sup>ヒ</sup>る義<sup>ハ</sup>ふて斗ハ處<sup>ハ</sup>ふれ  
バ此泉門の事小始りて其よりハ其坂路小取塞<sup>ト</sup>く<sup>千</sup>  
人所引磐石の靈<sup>と</sup>坐すハ衢比古ハ衢比賣神<sup>と</sup>共小  
御カを合せて道衢を守給ふ故小道衢ハ必其神の坐  
す處ふる故を以て布那斗<sup>と</sup>云<sup>と</sup>其義ふる可<sup>し</sup>名義  
抄小岐を知麻多<sup>と</sup>有<sup>を</sup>以見る小岐神<sup>ハ</sup>申<sup>して</sup>衢神  
の義ふり<sup>其ハ久那斗<sup>と</sup>申<sup>す</sup>も同<sup>ト</sup>處<sup>ト</sup>云意<sup>ハ</sup>成<sup>て</sup>道  
講<sup>義</sup>小云<sup>る</sup>を見<sup>べ</sup>く<sup>神名式</sup>小河内國大縣郡石神社</sup>



然して此常  
世の傳十九百  
十三十九五百  
云々常世思兼  
神常世長鳴  
鳥の常夜之  
而常夜の義  
有り

常世岐姫神社並給へるハ必右の三神を分て二所小  
祭れるふり此小因て見る小岐神ハ女神小坐事著明  
一清和天皇実録小負觀九年二月廿六日丙申以河内  
國大縣郡石神常世岐姫神並列官社と有て並給へる  
ハ所由有る事ふる可く河内志小常世岐姫神社を今  
赫ハ王子と有ハ大ハ衢小塞坐神ふるより然る神名  
ハ負坐るふらめ此亦甚古き事かり日吉祇園不  
ぞ小ハ王子とて坐を中昔より五男三女神と云ハ説  
の誤ふてハ衢神より混ひたる者ふり太神宮行事記  
二月條小ハ王  
子祭黄葉遊云々云事の有を中村と云地の氏神ふ  
り云事ふれども其ハ元岐神より出たる可く其遙

并所の事を子良殿東石神積と有る由有げふり此小  
限らず諸國小ハ王子社とて多在るハ大元岐神ふり  
○又投其帶云々を此ふてハ前の因曰云々小並擧  
れたれば其引續ふ在る事の由ふるを古事記ハ右  
の黄泉國の事を結めて更小是以伊邪那岐大神詔吾  
者到於伊那志許米志許米岐穢國而在邪理故吾者爲  
御身之禊而到坐坐紫日向之橘小門之阿波岐原而禊  
袂也故於投棄云々所成神名云々有を以てハ此  
後小袂除の事有て其時小斯る神等の成出る事見え  
ず第十一書ふても御禊の時小成坐る神等の中ハ  
右等の神等ハ無く今何れを正くと爲むと情考る小



△ふり弟土言ハ  
掃之と云ハ此ハ  
當れる事傳十  
三四ハ委ト云  
を考合せて曉る

此御紀の方正くうる可ハ故大人等の説ハ本よ  
く見べし凡物ニ有る時ハ必正説有り異説有て  
ニ共ハ相並べて可ト云事の有べくも非れハ又此を  
定めずハ有事の状を思ふハ御身ころハ其より遙ふ  
る筈紫ハ至くせ給ふ迄も濯清め給はず御在く坐し  
とも云ハゴ云べき事ハ有れども然計り汚穢キ醜  
國の汚惡ハ觸たりし物を念じて御させ御在く坐べ  
きハ非れハ其泉門を出給へる即投棄給へりしふて  
即黄泉門の内ハ投入給ひしふり其ハ此ふてハ上ハ  
辨たる如く次序違たる事ハ有れども彼鬼等ハ杖  
を擲給へると其ハ並擧たるハ同ト時の事ふる上ハ

然らハ此説成て後ハ伊弉諾大神の解除ハ善惡事種百坂ハ被身條滌の時の贖物の  
事を思得たり傳二十一百七ハ云云カ如ク第十一ハ一書  
ハ歸而盟之曰旌離吾衣負於旒於所啞也神號速禰の度ありてハ叶ハざる  
五之男次掃之神號泉津事解之曰ハ二神速禰と有ハ此  
時直ハ惡解除ハ行ハせ給へるハ此ハ投其帶と有ハ以下  
ハ其時の凶棄物多ク事短ハ泉國ハ若留カ因早息此實て彼國ハ贈くせ給ハハ事  
過即投其杖云ハ謂ハ道知食奈の林ありカ者時奈  
式ハ六月十日晦日大夜ト共ハ道知食奈を破行ハハ此  
故實ハ依れり事を思ハ其ハ此ハ神禊の時ハ除こり盡て清まり竟マセ



合ふり弟土言ハ  
掃之と云ふハ此ハ  
當れる事傳十  
三十四ノ委ト云る  
を考合せて曉る

此御紀の方正くうる可ハ故大人等の説ハ本心  
く見べし凡物ニ有る時ハ必正説有リ異説有て  
ニ共ハ相並べて可と云事の有べくも非れバ又此を  
定めずハ有事の状を思ふハ御身ころハ其より遙ふ  
る筑紫小至くせ給ふ迄も濯清め給はず御在り坐し  
とも云ハゴ云べき事ハ有れども然計り汚穢ヲ醜  
國の汚惡ハ觸たりし物を念じて御させ御在り坐べ  
きハ非れバ其泉門を出給へる即投棄給へりしめて  
即黄泉門の内ハ投入給ひしかり其ハ此めてハ上ハ  
辨たる如く次序違たる事ハ有れども彼鬼等ハ杖  
を擲給へると其ハ並擧たるハ同ト時の事ふる上ハ

其岐神の禦ミ塞給へる鬼等を祝詞ハ根國底國與鹿  
備 疎 備 來物ト有る其物ト云ハ此ふる煩神閑嚙神  
ふと云神も其屬ふて根國底國ハ亘る神ふる事下ハ  
其傳ハ云を見て知べきふり但予も大袂詞講義ふて  
も先年ハ説たりし事ふて此ハ袂身條條の時の贖物の  
始ふれば筑紫小ての御身條の度ふくでハ叶ハざる  
か如くふれども時過て後ハ海より流し入ひよりハ  
直ハ泉國の雷ふと令負て彼國ハ贈くせ給ハむ事  
道理ハ於ても甚近ク者ふるをヤ但御身ハ觸給へる  
ハ水を濯ぎて流し却給ふより外ハ爲べき道の非れ  
ハ其ハ筑紫の御袂の時ハ除こり盡て清より竟ませ

○日本書紀傳十

○二百十六

此の御紀の方正くうる可ハ故大人等の説ハ本心  
く見べし凡物ニ有る時ハ必正説有リ異説有て  
ニ共ハ相並べて可と云事の有べくも非れバ又此を  
定めずハ有事の状を思ふハ御身ころハ其より遙ふ  
る筑紫小至くせ給ふ迄も濯清め給はず御在り坐し  
とも云ハゴ云べき事ハ有れども然計り汚穢ヲ醜  
國の汚惡ハ觸たりし物を念じて御させ御在り坐べ  
きハ非れバ其泉門を出給へる即投棄給へりしめて  
即黄泉門の内ハ投入給ひしかり其ハ此めてハ上ハ  
辨たる如く次序違たる事ハ有れども彼鬼等ハ杖  
を擲給へると其ハ並擧たるハ同ト時の事ふる上ハ



給ふ小至れ 故古事記の文を正し見る小右小引る文  
小續けて到坐坐紫日向之橘小門之阿波岐原而袂被  
也於是詔之上瀬者瀬速下瀬者瀬弱而云くと列ぬれ  
バ此下小伊弉諾尊既還乃追悔之曰吾前到於不須也  
凶目汚穢之處故當條去吾身之濁穢則往至筑紫日向  
小戸橘之櫛原而被除焉遂將盥滌身之所汚乃興言曰  
上瀬是太疾下瀬是太弱便云くと有小打合て此彼の  
異無れバ其中間小在る故於投棄御杖所成神名云々  
より右件自能戸神以下邊津甲斐辨羅神以前十二神  
者因脱著身之物所生神也と有迄の文を故其所謂黃

二百十七ノ

御杖甚似著也其坂墓を留出雲國之伊賦夜坂也の下小置ても

觸乃御身觸乃御身 離離乃御身 故州神續故州神續 板訂板訂 小決く右の古  
其泉門其泉門 事事 錯錯 物物 投棄投棄 云ひ因脱著身之  
二百十七ノ 事事 詔詔 乃乃 惡惡 解解 乃乃 善善 解解 乃乃 始始 乃乃 此此 乃乃 故故 乃乃 古古 乃乃 所所 乃乃 置置 違違

へて傳たり者ふりけり借今此御紀を正しと立て  
云時小ハ御身小着る物を右の如く泉門より返し贈  
りて給へる小御身の穢を滌がせ給はずして遙小筑  
紫小至りて御在り坐て物為させ給へるハ如何と云  
小其穢小觸たる御身を滌がせ給ハ其便有る海又川小下立り坐て 何の難事  
りハ御在り坐む元より出給へる其泉門を遠去る事 乃乃 祈祈 乃乃



給ふふ至れ 故古事記の文を正し見るふ右ふ引る文  
小續けて到坐竺紫日向之橘小門之阿波岐原而襖被  
也於是詔之上瀬者瀬速下瀬者瀬弱而云々と列ぬれ  
バ此下小伊弉諾尊既還乃追悔之曰吾前到於不須也  
凶目汚穢之處故當祿去吾身之濁穢則往至筑紫日向  
小戸橘之櫛原而被除焉遂將盪滌身之所汚乃興言曰  
上瀬是太疾下瀬是太弱便云々と有小打合て此彼の  
異無れバ其中間小在る故於投棄御杖所成神名云々  
より右件自船戸神以下邊津甲斐辨羅神以前十二神  
者因脱著身之物所生神也々有迄の文を故其所謂黃

泉比良坂者今謂出雲國之伊賦夜坂也の下小置ても  
聞ゆる所あり故此御紀を以て校訂す小決く右の古  
事記の文ハ錯乱たる物うう投棄と云ひ因脱著身之  
物と有が御襖小是似着ハ事故事古人も所を置違  
へて傳たり者ふりけり者今此御紀を正しと立て  
云時ハ御身小着る物を右の如く泉門より返し贈  
うて給へる小御身の穢を祿がせ給はずして遙小筑  
紫小至うせ御在う坐て物為うせ給へるハ如何と云  
小其穢小觸たる御身を其便有る海又川ハ下立し坐て祿がせ給ハ何の難事ひ何の難事  
うハ御在う坐む元より出給へる其泉門を遠く遠く給

泉比良坂者今謂出雲國之伊賦夜坂也  
聞ゆる所あり故此御紀を以て校訂す小決く右の古  
事記の文ハ錯乱たる物う投棄と云ひ因脱著身之  
物と有が御襖小似着ハ故古人も所を置違  
へて傳たり者ふりけり今此御紀を正しと立て  
云時ハ御身小着る物を右の如く泉門より返し贈  
うて給へる小御身の穢を祿がせ給はずして遙小筑  
紫小至せ御在坐て物為せ給へるハ如何と云  
小其穢小觸たる御身を祿がせ給ハひ何の難事  
うハ御在坐む元より出給へる其泉門を遠く遠く



△よて詔ゆる恵  
 解除善善解除  
 の始よて此を  
 公高解除次  
 ちる乾紫お  
 りハ善解除  
 の由なり

洗滌がせ御在り坐ずてやハ有べき此ハ深き由有  
 る事ふり然る甚ぶき汚穢ハ觸させ御在り坐りハ  
 中ハ容易く除こり難ふりけり故粟門速吸名門  
 と往見給ひ終り日向戸ハ往坐て襖袂ハせ給へり  
 が此ハ皇祖天神を齋奉らせ給ひ其御霊を得て思ふ  
 すが如く其穢を流離ひ失給へり者ふり其ハ下ハ  
 註不可女云ハハ大枝詞ハ天津神被天磐門乎押披  
 氏天之八重雲乎伊頭乃十別尔千別氏所聞  
 食武國津神波高山之末短山之末尔上坐氏高山之伊  
 總理短山之伊總理乎揆別氏所聞食武云くと有て罪  
 咎を被ふ事も天津神を本にして諸神等共ハ行ひ物  
 爲させ給ふ趣ふる心を着べし彼蛭兒淡洲の出来  
 り時ふも皇祖天神の御心をト問申給へり如く何  
 事も天津神ハ依て行給へり伊弉諾大神ハ坐了物を

此大事ハ於てハ御一己○御帯ハ記傳六十七ハ美淤  
 の御行ハ非る事明けし○御帯ハ記傳六十七ハ美淤  
 備と訓べし武烈天皇御紀歌ハ於袞袂淤能淤於寐と  
 有り淤備ハ淤夫と云用語を體語ハ爲たる各ふり万  
 葉ハ帯ハ爲る事を於婆世留とも楮序ハ於各帯字謂  
 多羅斯と見えたる如く記中多羅斯と云ハ允て帯字  
 を言れば此も然訓べきハヤとも思へど多羅斯ハ淤  
 備の事ハ非で帯弓箭ふと云ハ帯字の意ふる可し  
 云ハ但右の歌ハ淤於寐能之都波抱夢須寐陀黎と有  
 れハ多羅斯ハ令虫の意ハ猶帯を然も云るハ有  
 り御弓を御執と云ハ御劔を御佩と云例ハ依れハ古



△万葉集三十四の  
倭文幡乃帶解  
替而十行小白  
栲帶可乞哉  
十二行去家  
之倭文旗帶  
平結重又古之  
帶絞織之帶  
平結重ふと  
有て帶ハ倭文  
を以て製衣也  
古事傳十九  
三百二五注カ  
ナニナ注カ  
切一右の歌の  
状を以てし帶  
をバ引重しけ  
らし其ハ十六ハ  
水縹絹帶  
尾引帶成と  
も云リ

言小帶を御多羅斯と云けめども姑く美於備と訓  
て後人の定を誤つ者ふり義あり又美祁志と云ハ御  
着物を御衣と云ハ御襲の  
着爲と云事ふれハ帶をも於備とも多羅斯とも云て  
一ハ負る意一ハ令出の意ふて兩名を用たり故ハ  
古事記序ハ右の如く書れたるふりめども  
當時已く帶を常ハ多羅斯ハ云ざりあり○長  
磐神古事記ハ道之長乳齒神と有り然れども此ハ  
御帶と云ふ言の縁より下ハ云ふ泉門塞大神の亦名  
の混れたるふる可し然れば此ハ古事記ハ次於投棄  
御裳所成神名時置師神と有る其神ヲ此ハ成れり  
ける其ハ男神の御装ハ御禪ころハ有べりけり  
瑞珠盟約章ハ日神の男の御装爲て給ふ所ハ縛裳

爲袴と有が如く裳ハ女の物ふれハ此ハ出たるハ誤  
ふり故思ふハ帶字と裳字ハ楯搭書ハてころ其字  
畫も大小違ひてハ有めれ草書ハてハ能相似たりけ  
るより一ハ帶とし一ハ裳として記し分たりけめど  
も其ハ古人の誤ふれハ御裳を御帶ハ易る時ハ神名  
の時と解とを兼て妙ふり然るハ道之長乳齒神と云  
も有ハ就て其を御帶の方ハ屬て心ふるずも於御裳  
云くとハ書れしめども何れふしても此ハ在てハ  
叶ハざる傳ふり下二百五見合可  
古事記ハ此ハ限らず此時ハ成れ  
一ハ衝立船戸神此ハ彼大桃樹の所ハての神あり  
此より前ハ成坐て此列ハ非れハ此を除く可ハ二ハ



道之長乳齒神ハ右ハ云ハ如ク子細有レバハ此ヲ除ク可シ  
可シ然レバハ十二神の内ニ神ヲ除ク時ハ残レルハ九神  
成ル其正ノ数ヲ所思エタリ次ハ云フ賀茂大人ノ祝詞考ス古事記ハ所見タル道之長乳齒  
神道保神共ハ同神ふリ長乳齒ヲ神代紀ハ長道磐ヲ  
書スハ道郷祭詞ハ湯津磐村之如久塞坐ト有ク同意  
ふテ八衢比古八衢比賣神ヲ申フリト云レタルハ甚  
卓シ見ルふハ有ケル然レドモ此迄ハ考究スレタ  
レドモ其八衢比古八衢比賣神ハ何レノ神ト云事未  
得ルレダリツるヲ古史徴ハ彼詞ヲ紀記ハ引合セテ  
此ハ彼豫美戸ハ塞坐ス道反大神ふル事疑無キ由ハ

云レタル実ハ然ル説ハ但於投棄御帶成神名長乳道  
齒神ト有ヲ取テ時置師神ヲ除ラレタルハ右ノ神等  
ノ説無リ故ハ其正ト迄ハ及バレザリ者ハふリ  
けリ又同書ハ古事記ハ次於投棄御禪所成神名道保  
衢ハ塞坐テ守給フハ八衢比古ハ衢比賣久那斗神ノ大ハ  
混乱テ殊ハ道保神ト云神ノ成ル由ハ語傳ハタル  
長道磐神名義長道ハ字ノ  
△祈年祭詞ハ自陸往道者道無間久立都ヲ無云可カ  
佐久弥白馬丸至留限長通無間久立都ヲ無云可カ  
葉四行ハ思哉將去道始水年傳五行吾平遠漢路之  
長中吟五行ハ國遠伎路乃長手遠又行都祈斯良農  
長手表十二行雖往不歸道之割申氣南五行也吾我道之  
道乃奈我之辛ふト有レ後ハ物ハ新六帖ハ海人ノ住ハ  
里ハ長手ノ道續キ限有クヤ恨意ハ又得ル行ハ道ハ何レヲ云フト云ハ彼黃  
音高々玉牙ノ道ノ長手泉夏ノ暮れルト後者也神聖ハ坐セバ其國ノ往來ヲ







△丈夫集の巡り  
逢む契の未  
長道磐の神  
の道守を頼む  
計り」と有と  
此神の長道を  
守給ふ事云々  
合ウ

塞遏め給ふ由ふり万葉九三丁小遠津國黃泉乃思尔  
とも見れ<sup>へた</sup>バ実小長道と云者ふり<sup>記傳小神名の由ハ</sup>  
似たれバある可しと云れたれども盡さず又記傳小  
云古今集小下の帯の道ハ旁分るとも行巡りても逢  
むとぞ思ふと有を契沖ハ下の帯ハ道の枕言小て此  
の故事小依れり云り然れども唯頭昭ガ云るガ  
如く帯ハ彼方此方へ分れて前ふて又逢ふ心以て詠  
り<sup>と</sup>見ゆ六帖紐の歌小奥山の繁り小立て逢ふとも  
妹ガ結び紐を解めや契沖云此ハ紐ハ二有る物ふ  
れば道小迷へる時小解て何れハ行むと占ふる可  
くと云り紐と帯ハ同トければ此小由有り未木抄  
小爲相郷巡り逢む契の末ハ長道磐の神の道守を頼  
む計り<sup>と</sup>有り<sup>と</sup>有り<sup>と</sup>右の六帖の歌の如きハ衛神  
ふして甚能叶へり<sup>と</sup>雖も帯紐を以て詠るハ此の傳  
ふ依れとふれ<sup>○</sup>於<sup>此所小長道磐神と有</sup>投棄御裳と云ハ右小云る如く古  
事記の誤ふるガ其時置師神と申すハ決く御帯を投

給へるふ依て成坐る神ふる可く思定めて此の文を  
又投御帶是謂時置師神又投其衣是謂煩神又投其禪  
是謂開嚙神と姑く故見る小此三神ハ謂ゆる病神小  
て時置師神ハ氣を主り煩神ハ靈を司り開嚙神ハ食  
物小て體小係れる神ふるガ此御帶御衣御禪を投給  
へるふ依て成れると云ハ元來伊弉諾大神の黃泉國  
小して見給ひ聞給ひ又御身小觸給へる事共小依て  
不成出けむと推量しれ侍り<sup>次小及投其履是謂千敷</sup>  
小伊弉那美命謂黃泉津大神亦以其追斯伎斯而号道  
敷大神と有れハ同名の神の有べくも非るを思ふ可  
ふ者時犯師神ハ時を犯す義の名ふり其始を思ふ小



上ノ所見たる伊弉冉尊ノ吾當寢息請勿視之ト有クを  
伊弉諾尊不聽云ク而見之ト有ハ其時を犯シ給ヘる  
ふるが此ハ依て種ノの禍事共ふハ出来れりければ  
其ハ所由る神ニ由リと所思たり第十一書ハも旗  
也勿レ着吾矣伊弉諾尊不從猶着之ト見え古事記ハ  
莫視我如我白而還入其殿内之間甚久難待故云ク而  
入見之時云クと有ハふハ是ハふり其時を犯シて入見坐  
めく汚穢キ狀を見給ヘるハ後迄も伊弉諾大  
神の御身ハ着て在リが今別ハ神ト成ルふり煩神の  
和豆ハ我ヲ着キて良比ハ有ハ合ハふり其ハ伊弉諾大神の  
吾不意到於不須也凶目汚穢之國乃急走迴歸云クと

有ハが如く速ニ走歸シせ給ヘるハむハ事ハも勿クむハ  
所思ハけむハを女神の泉津醜女を遣ハて追奉リ令給  
けるハ左トすればハ右トして種ノの煩ハ事共許多有リ  
り此即然る御心を憐ニ奉ル神の成出ベる所由ハふ  
む有ハべりけり弟九ノ書第十ノ書又古事記ノ趣モ  
前後始終ハ互ニ開シ嚙シ神ハ古事記ハ飽ク咋ク之ハ宇斯神ハ有  
る飽食の字の義ハ伊弉諾尊ハ吾已食泉之竈其ト  
有ル其ふむ黄泉國の大禍事の出来起の始ハりければ  
ハ追及て往坐る男神の御方ハも其ハ肖シて給ヘる  
り此ハ至テ斯ル神ハ成出たりハ者ハふり應神ハ天皇  
神紀ハ初



天皇角而天神地祇授三韓既產之完生朕上其形如靴  
 是肖皇太后為雄裝之負靴と見え此云阿敷と有  
 る肖字を名義扱ふ能理と也尔多理と也阿要多理と  
 も訓るハ似ふり似有ふり阿敷と云ハ其ハ似たる事  
 の出来る借人の疾病と云者ハ氣より犯さる者有  
 り風寒暑湿の病を為す是ふり靈ハ係列ふ者有り喜  
 怒哀樂の病を為す是ふり又形體を破損ふ者有り飲  
 食過度是ふり是が天下ハ在ゆる人民の苦瀕ハ落て  
 患惚し病と云者の起れる始ふりけるを誰しの人  
 も然る心も着ざりゆるふや伊弉諾大神の彼汚穢  
 醜國より復坐し時ハ唯諸の惡神耳成れりとして  
 病神と禍神との差別を立ざるハ甚く麓漏ふる事ハ

△和名枚鬼魅類  
 出たる鬼ハ  
 特置神の屬邪  
 鬼ハ煩神の屬  
 鬼ハ開嚙神の屬  
 當り鬼醜女天  
 孫女ハ次ハ福  
 神の類あり借

ふむ有ける△此を廣く摠括て云時ハ病も禍事の中の  
 一種ハ有れども大旨病ハ人の形體ハ就て本ふり  
 禍ハ人の作用ハ就て末ふり斯れば此ハ出来れる時  
 置師神煩神開嚙神計り可畏し神ハ非る可し故人疾  
 病ハ羅る時ハ其身の起立つ事ハ出来し寝伏す事  
 ハ右の三神ハ伊弉册尊ハ屬く理ふるが故ハ道饗祭  
 詞ハ根國底國與麓備 疎備 束物と所見たり此ハ顯  
 成れる神と雖も其物實ハしも彼國の汚濁ハ觸給へ  
 る物実ふるが故ハ其神も彼國の神の群ふるふり  
 第十一書ハ菊理媛神亦有白事伊弉諾聞而善之乃散  
 太矣と有ハ又投其帶云この神の成れは時の事ふり



ければ其神等ハ彼國の物実ハ成れる神ハ有れば  
岐神ふどの如き頭國の物実ハ成れる神ハ伊弉諾大  
神ハ元より属給ふ可き神ハ坐故ハ其を宣別けて令  
白給へり故ハ聞食て善給ひ彼國へハ右の三神等  
頭國へハ八衢比古ハ衢比賣久那斗神三柱ハ相率給  
ひて散去給へる者とゾ所見たりける然るに彼  
こせ給ひ何事を善て散去坐すと云ふ事実ハ當れ  
る事無を思ふ可し此より彼と次ハ迫以て行く時  
ハ遂ハ此説の生る神祇令季夏道饗祭の義解ハ謂ト部等於京  
城四隅道上而祭之言欲令鬼魅自外来者不敢入京師  
故預迎於路饗良遇也と有ハ鬼魅を路ハ迎へて饗良遇

めさせ給ふ如く聞ゆれども鬼魅を禦給ふ岐神を令  
坐て祭らせ給ふ謂ふるが臨時祭式ハ宮城四隅疫神  
祭又幾内塚十處疫神祭ふと云目の出たるハ何れも  
右の道饗祭の處ハ就て祭らせ給ふ如くも聞ゆれど  
も此ハ疫神を禦守給ふ神を祭らせ給ふふるが其祭  
る神ハ八衢比古ハ衢比賣久那斗の三神ふれば其神  
ハ饗して過る神と云ハ疫神ふるが其疫神ハ即右の  
時置師神煩神開嚙神ふる事能て泉門の事実ハ考合  
せて曉る可き者ふりし此ハ道饗祭詞講義ハ己ハ  
委しく説たる説ハ今更  
ハ云べき事ハ非れども岐神ハ疫を守り小就て疫  
神とも申せるを眞ハ疫を行ふ神ハ此ふる三神ふる



合時を犯す云義  
ふり古事記水垣  
宮段始小疫病  
多起有対て  
下小神氣不起  
云是即神の氣  
を犯して病ひ  
ふり因て神氣ひ  
ふり  
復記傳サ三行ふ  
役を延他知と  
云延他知役  
立ちり疫病と  
漢籍小民皆病  
也と云り如く人毎  
小病を彼役のひ  
されて立ふ似た  
る致す可ひ  
云れたる方勝れ  
る小也

故小少驚し○時置師神公和名抄病類小疫衣夜美一  
置むとふり○時置師神公和名抄病類小疫衣夜美一  
云度岐乃々有て名義抄亦此小同ト夜夜美トハ得  
病ト云事小て風寒暑湿小感ひて病を爲し又一人此  
を病む時ハ人小傳染すふと何れも得て病む義ふり  
一云度岐乃々云ハ時氣ト云事小て言ハ違へれど  
も亦右ト同ト意ふるふり 通證小疫を夜夜美ト云ふ  
衣以音爲訓也ト云ハ何事  
が己小崇神天皇神紀小五年國內多疫云ト七年の  
下小も於是疫病始息ト見え古事記同段ハ此天皇  
之神世疫病多起ふと有ハ何れも衣夜美ト訓より外  
無テ所ふり此等ハ後小漢字の渡たる後小疫の字音  
を以て出来りし言を古小及不して如此記されたり  
とも云ハト云る可けれども古ふりして然計の病名  
ふり小号る事の何とけり出来ざむ氣の言の如く  
音訓相同ト云言も千萬言の中ハ何トハ何トハ何ト

合事多るが惡  
氣災ハ外より  
入て内を犯す  
ちも惡味災ハ  
内より起りて  
外及べらる  
萬の病因此ニ  
小過じら事次  
小説を見て知  
べき

○神武天皇御紀  
景行天皇御紀  
小毒氣を阿  
志伎伊伎割  
ふり

いふ餘り小他犯ト云ハ大同類聚方流ガ乃慕登比ヒ條  
いふ餘り小他犯ト云ハ大同類聚方流ガ乃慕登比ヒ條  
小少嘉名命乃美古登仁阿旨解王邪阿旨阿治咏差乃  
不方津者耶麻比乃門止亭別ト有ハ病門を云る大綱  
の文ふり流弊乃慕登比トハ災之基ト云事ふるが比  
小假字違へれども泥む可くトズ本文ハ惡氣災ト惡  
味災ト此二ハ病の元因モトふりトふり其阿旨解王邪ト  
云るふじ時置師神小係る事ふりける。借病を右の如  
く流弊ト云ハ寶劔出現章第六一書大已貴命少嘉名  
命條小爲顯見蒼生及畜産則定其療病之方又爲攘鳥獸  
昆虫之災異則定其祭厭之法ト有る災異是ふり其ハ  
第一



△此事傳二十九  
卷二百二十七の妻  
しけ九ハ就て見  
へ

章小於保奈年知命乃美己止仁古廻美波阿萬乃保乃  
計都知味豆阿治子奈伽和太仁伊連伊太須古登乃太  
要邪流子都倭止之底曾能奈訶美仁万都此免倭邪奈  
須裳奴子耶麻比止伊布故靈字萬自奈比耶年流仁能  
里阿埋古連久須乃里登伊婦と有て禁厭の事を久須  
乃里と云を以て其の災異も此の流焚と同トく病を  
云と知阿志計乃毛能乃字奈自豫李母登須治仁伊當  
別天阿万祢九美鳥知仁比路支和差奈志ハ惡氣の物  
の項より本筋小至りて遍く身内小弘ぎ災成しと云  
ふて其阿志計乃毛能と云ハ下小病門をハ小分てる  
其弟七小母能乃解者万自故俚ハ太毛乃解多訶可  
味乃今と有る其小母能とハ彼鬼魅を云て道郷祭  
詞小麓備疎備来物と有る是ふり万自故俚と云ハ右

詞小云来物ハ相章相口會事無ハと有る其小て大  
祓詞小畜ハ盛物為罪ふと有も同トく人小交りて  
懲七び了鬼魅の掌所為を云ふり次小ハ太毛乃解  
と云ハ其大祓詞小畜仕志と云事の有る其を云ふり  
次小多訶可味乃ハ又其詞小高津神乃災と見え  
たる是小て上小引る水垣宮段ふる神氣と云も此小  
同トく皆項より入る事と所見たり今も夜行ふと  
の時ふて樹神山鬼ふとの棲べき所を通合する時ハ  
項後より始りて身も縮むが如き事有ふとを考合せ  
て神の御言の違ハざるを思ふ可ハ  
此等の如きも皆  
氣小顔る事共人



△日宗行天皇二十八年神紀云吉備  
 元濟神及難波柏  
 濟神皆言心以放  
 毒氣令苦路人  
 並爲福害之數  
 故悉殺其惡神  
 開水陸之徑  
 見元又曰武尊  
 の御前小白鹿  
 化て來れる山神  
 といふ騰吹山神皆  
 右の氣に係つる  
 るハ其神小屬だ  
 妖鬼あり

皆時置師神の所爲ふりて知べし源氏物語ふど小物  
 氣と云事多く出たりも皆鬼物小犯さるしと云る者  
 り末太阿之計乃久知波奈珥伊流毛乃波布俱之與哩  
 乞登須治仁都多比伊當理臣乃知奈訶倭太仁伊太利  
 泥座奈須毛乃美奈於訶在味坐登伊布と有る此ハ上  
 章の鬼物ふと係れの違ひて唯惡氣の災を云ふり文ハ又惡氣  
 の口臭小入る者ハ肺より本筋小傳ひ至りて後中藏  
 小至り災成す者皆犯災と云ふとふり右の於訶在味  
 坐と云ハ次小味座乃倭訶知と云る第一小在て於伽  
 在味坐者非延乃解奈都乃解訶坐計惠耶美惠智耶美  
 波良奴伊裳美波陀々伊裳と有て其分ハハ一ハ寒氣

二ハ暑氣三ハ風氣四ハ疫疾エふるが愛エの假字ふる可  
 うを惠小作れハも拵ハハ斯る違も有り五の惠  
 智耶美ハ詳ふハ六ハ腹氣七ハ暖膚氣カふて熱氣を  
 云ふる可ハハ瘡瘡イふて氣瘡イと云事ふる可ハ和名  
 抄小咆瘡裳を裳瘡裳と有ハ伊ハの者ハりハ者ハ聞ゆ又於  
 非阿多俚波阿克布利紀利解都由解波太津々於非と  
 有ハ右犯災ハの如ハハ非ハ凡ての身ハ負ハ中ハふる  
 ふるが雨降り雨露氣又露氣膚津氣負の四ふるが此も  
 氣小感け犯さるハふれども病の條理を分る故小負  
 中ハハ云ふり此等を以て時置師神と云義ふハ飽く



△京行天皇御紀曰  
本武尊の以蒸て  
白鹿を彈き給  
へ所先是度  
信濃坂者多得  
神氣以瘵卧但  
殺百鹿之後  
此是山者  
望人及牛馬自不  
中神氣也  
山氣の事ふり  
△又伊勢風土記曰  
神武天皇御宇  
惡神伊不加理  
人臣之氣怒起  
而天下不安云と  
有る伊不加理ハ  
氣吹在て此  
神氣を吐て人  
を懼す云云

論

迄詳く小曉り知らる可うりける借右の八を鼻口よ  
り犯入て人の病を爲すと云事ハ人智の得くも思跋る  
まじり事ふるも多在る傳十九百二万葉十四丁小不盡能祢乃  
伊夜等保奈我伎夜麻治子毛伊母我理登倍婆氣尔餘  
婆受吉奴と有て古く氣ふ醉と云諺の有をも考合て  
て神代の傳の津虚くくざるを知べし神武天皇御紀  
進至熊野荒坂浦亦名丹敷浦因誅丹敷戸畔者時神吐  
毒氣人物成瘁云々千時天皇適寐忽然而寤之曰予何  
長眠若此予尋而中毒士卒悉復醒云と有ハ右の阿  
志計乃毛能阿之計との二小且る事故小此の細書  
小引るが右の毒小中りて瘁させ給へる小下小至て  
醒と有ハ鼻口入りて犯く奉れるが故ふり借犯ハ  
於加志と有り於加須と有る何ふ出たるふも皆  
於訶五と有り於ハ堪書の例ふれば然心得て有べし

借次ふる煩神開齧神と古事記小和豆良比能宇斯能  
神飽咋之宇斯能神と云る例を以思ふ小此神も時置  
師之宇斯能神して其時犯くを行ふ疫神の主領ふる  
可き事云も更ふり宇斯と云義ハ次ふる煩神の下小  
説べし○投其衣ハ記傳六丁小美曾と云も古言ふ  
れや猶美祁斯と訓べし八千矛神の御歌小奴婆多麻  
能久路岐美祁斯遠云々籬迹抑理能阿遠岐美祁斯遠  
云々と見え万葉ふも十三丁小公之御衣尔織將堪  
可聞十四丁小伎美我美家思志安夜尔伎保思母ふと  
有る有が如く此も衣を美祁斯と訓べしふり其美ハ







衣ハ伎奴ハ當リ裳ハ禪又ハ裳ハ當リ服ハ許呂母ハ  
當リ可シ袍和名宇倍乃岐沼縫掖和名萬都波之乃宇  
倍乃岐奴背子名加良岐沼單衣和名此止閑乃岐沼  
裕衣和名阿波世乃岐沼布衣獨衣加利岐沼ふ皆上  
ハ在リ衣許呂母ハ古事紀八子戸神の御歌ハ曾米紀  
賀斯流ハ斯米許呂母遠麻都夫佐迹登理與曾比見  
元仁德天皇二十二年御紀ふる御歌共ハ虛呂望虛曾  
赴多弊茂豫者云々又那菟務始能譬務始能虛呂望赴  
多弊者氏箇區滌云々と有テ許呂母の下ハ眞具ハ小  
取裝束いとも二重も宜きとも二重着て圍むとも續  
けさせ給へるを考ふる小摠てを許呂母と云ふて美祁  
斯と共ハ廣き語ふりと知べハ万葉一五丁大御歌ハ

小保布榛原入乱衣ハ保波勢と詠て給へるも摠てを  
宣へる小上小引る狹野榛能衣ハ着成と一方小眼  
を着て云々ハ異ふり然れバ許呂母と云ハ着諸の字  
の義ふる可ハ又万葉一ハ我宿有衣乃上従ふ有ハ  
小在を衣云ひ下小在を裳と云ひて摠謂之服也  
云ハ服字ハ當リ可ハ和名抄衣服類ハ鉄掖和岐阿介  
乃古路毛欄衫須曾豆ハ乃古路毛一云奈保之能古  
路毛表和名加波古路毛俗云加波岐沼ふ見えたり  
○煩神ハ上小引る大同類聚方ハ少彦名命ハ美古登  
仁阿旨解王耶阿旨阿治味差乃布太津者耶麻比乃門  
止帝別々見えたる阿旨解王耶ハ氣ハ屬る病ハ時  
置師神の當る所ふる事右ハ註せるが如ク阿旨阿治



味差ハ體ハ屬る病ハて開嚙神の司る所ふる事下ハ  
 傳ふるが如くふれハ此二の外ハて心を勞らし惱マ  
 せる病を和豆良比と云て右の氣ハ體ハ小就たる病  
 の本の本ふり同書於保奈牟知命乃美己止仁云々比  
 登乃美乃奈連流半自免波安萬都美佗麻美豆保乃計  
 乃不多通乎加波世保豆祢奈理智之保奈利士々奈利  
 須知奈利保念奈利南訶味多奈俚與通依太奈利訶波  
 奈利波奈利剝久知那剝萬那古奈俚美味阿奈利剝加  
 美々奈利遊毘奈利都鬻念奈流と見えたる其始ふる  
 天津璽と令病ふるれば病と云中ふる殊ハ可畏ハ

△傳九三  
 云々がゆ

△天武天皇九年  
 御紀ハ天武之の  
 字を和豆良  
 布と訓

△神功皇后御紀ハ  
 煩を伊多豆使と  
 訓ハ痛著の心ふ  
 了を確畧天皇御  
 紀ハ勞竭字を然  
 訓ハ欽明天皇御  
 紀ハ煩を又伊多豆  
 賀波斯久と訓る  
 ぬや考ふ可

彼惡氣惡味の二災ハ外より来る病ふるを此ハ内よ  
 り出る病ふればふり若て外より入る諸病ハも何ハ  
 れの病も末ハ必此所借和豆良比ハ吾豆良比著有合  
 小至れるを思ふ可各義抄ハ厄を和豆良比と有る是ハ共  
 小て我ハ列り著たる病を云ふ和豆ハ万葉一ハハ  
 和膳所之良受と云語有ハ吾著も不知と云事ハて俗  
 小分別も無くと云事ハて此の和豆も右ハ同トク吾  
 著の意良比ハ其狀を云ふり神ハ在れ鬼ハ在れ人心  
 小依を託と云ふ其ハて天津璽を令病ふるハ其神の託  
 有が故ふり万葉五ハ丁ハ丁ハ年長久夜美志渡禮婆月累  
 夏今比許等々ハ波斯奈々等思騰五月蠅奈周佐加久



兒等遠宇都立々波死波不知見乍阿禮婆心波母延農  
 可尔可久尔思和豆良比祢能尾志奈可申々有を讀下  
 して見る小年長く月累収て病渡る身小く有れハ盡  
 ハ死むと思へども駿く子等を棄てハ死むハ知  
 ず見乍有れハ心ハ燃る故小左小右小思和豆良比啼  
 耳し泣ると云事小て病小係づへると死小も死れ  
 ざるを合せて和豆良比と云る小て吾小著て得忒  
 ぬ事を心小病て云語ふり記傳小病小障りれて清し  
るハ麿く名義杖小煩を和豆良布とも和豆良波志マ  
も宇流佐斯とも波宜志とも訓ミ又常小煩字を伊多  
豆伎とも伊伎陀多波理とも訓ミ字書小煩勞也と有  
ふりむを思念考へて考へる者ふり字鏡集小抄字を知和

關

△敏行集小迫  
 江の關寺小煩  
 らんて隠り  
 侍けるつと云  
 小

豆良布とも宇流佐志とも訓り然れハ宇流佐志又伊  
 多豆伎ふや云言も近く其意の通へるを合せて考べ  
 古今集詞書小心積ひて和豆良比けり時云く見え常小も何  
 と無く病心事を和豆良布と云るも多くハ心の勞づ  
 うハき方小取て云るふり又其より轉して其病を  
 和豆良布と云も其病の吾身小着たる意ふり又大同  
 類聚方小阿旨解王邪阿旨阿治味差と並て下小耶麻  
 比乃門止帝刹と有も病を和豆良布と云事を倒小置  
 て云ふり王邪ハ災異ふる事上小云るが如くふるが  
 此も其犯し令病る神小係て所ガ爲の義小て和豆良比  
 の和豆の吾著の意小甚遠くも非る語ふり然れハ阿



旨解和邪ハ阿旨解和豆良比又阿旨阿治味差ハ阿旨  
阿治和豆良比ハ心得違ふ事無可くふ記傳六  
ハ行遇神ハ行遇テ和豆良布ト云事有ハ此神ハ右の時置  
師神ハ云ハ然る言ハ行遇神ハ右の時置  
當る可キ故此神を古事記ハ和豆良比能宇斯能  
神と有り此ハ無れども御紀ハ宇斯ハ大人と  
被書る定格ハ天孫降臨章ハ大人此云志ト註シ  
れたり欽明天皇三十一年御紀ハ道君を道能宇斯と  
訓ニ用明天皇二年御紀ハ卿等ヲ宇斯と訓ル此二ハ  
人を敬ひて云語ふるが此言本ハ長者ヲ人ヲ佐ト  
り云るハ古事記御天降段ハ問其大國主神曰天照

太御神高木神之命以問使之汝之宇志波祁流葦原中  
國者我御子之所知國言依賜と有テ能分れたり宇  
志波久トハ上より被任ズて其國の長たるを云ヒ  
所知トハ其命を蒙りて其國ハ君たるを云ハり遷却  
宗神詞ハ自此地波四方ヲ見靈齋山川能清地ハ遷出坐  
兵吾地止宇須波伎坐止有ハ事任給フ如くハれ  
ども神の所在を現人神より賜ふ可キハ其地  
ハ就て長ト坐セとハり又万葉五三丁十ハ宇奈原能邊  
ハ母奧尔母神豆麻利宇志播吉伊麻須諸能大御神等  
と有ハ六三丁十ハ住吉乃荒入神船舳ハ牛吐賜と有れ



△宇斯ハ右の如く  
長の意ハヨリガ  
説く事ハハカ  
誰も貴人の義  
思ふめ故ハ今  
マ衰マ相通ハ  
示サバ神功皇  
后御紀ハ儲弦を  
衰佐由豆流ハ訓  
るハ古事記ハ宇  
佐由豆流ハ有り

ハ住吉大神ふるを其神の船路を守給ふ事何れの神  
より被依給へるふも非る故ハ宇志播久ハ詠るふ  
り宇志波久ハ其地ハ長として其境を有ハ義あり  
天皇御紀ハ劔を佩く事を持劔と書て其持字を波  
考合テ可ハ天孫降臨章第二一書ハ齋主神號齋之大  
人ト有ハ齋主として仕奉給へるを以て齋之大人ト  
ハ申せるふて其即長者の義ふるを曉る可ハ然れハ  
其群の長ハる者を宇斯ト云ハ甚能當れる言ふりハ  
右の君をも郷をも字斯ト訓るを以て佗人を敬ひ  
て某之大人ト云事も古ハ有ける事を曉る可ハ又人  
を敬ひて主とも云り空穗藤原君卷ハ此女能き盗人

ふり争て汝ハ右大將主の娘の文として云ハ新猿樂記  
ハ大郎主ふども云り大君中君四御許五君六君七御  
二君十四御許太郎主四次郎君四郎君八郎眞人ふ  
並出て君とも御許とも主とも眞人とも云けるハ  
る但其項字斯ハ餘リハ云ハ○投其禪ハ波加麻ハ  
こりしハ見えて中昔ハ見えズ  
ハキモ禪裳ト云事ふる可ハ記傳六九丁ハ御禪和名抄ハ禪  
八賀萬ト有る是ふり雄略天皇御紀歌ハ多信能婆伽  
摩塢那ハ陞鳴絶ト有り借字鏡ハ禪禪帷口大禪志太  
乃波加万和名抄ハ禪須万之毛能一云知比佐岐毛乃  
ふど有り如此分て呼ハ後の事ハ本ハ禪ハ禪も唯  
波加麻ふる可ハ字ハ拘る可ハ此ハ禪字を書



たれども必しも持鼻禪の事とも定む可うらず彼雄  
略天皇御紀の歌小那た陸鳴絶たと詠るを以て表の装  
束ふるをも波加麻と云る事を知べしと有が如し崇  
天皇十年御紀小禪屎屎曰禪今謂樟葉訛也と見え古  
事記小も屎出懸於禪故号其地謂屎禪と有ハ右の須  
万之毛能の履裳ふしと云故ハ瑞珠盟約章小縛裳  
爲禱も有ハ天照太神の男の御装を成し給ふ所の文  
ふり女神小渡して給へハ常ハ連幅れる御裳を御ま  
せ給へりしを其を縛り上て両股ふる御袴小成し給  
て履く物小成し給へる故小波加麻ハ云ふて裳の  
引纏ふ物を踏入て履く由の名ふり和名抄小野王案

合頁茂旧記小  
夜夢天神御  
子云各將逢五  
造天羽衣天羽裳  
炬火奈鉾持之  
と有ハ男神の  
科小天羽衣と  
有ハ

持

在上曰衣在下曰裳摠謂之服也と見え古事記ハ伊  
邪那岐大神ふも御裳と云事の見えむれば男の袴を  
も母と云しを摠てハ男ハ履く方女ハ纏ふ方ふる故  
小唯母と云時の女の事小耳成れども右小出せる  
和名抄の禪の下小松禪也漢語抄云松子毛乃之太  
乃太布佐伎と有ハ表袴を母と云て裳下之禪と云る  
ふり名義抄小も禪字を字鏡と回し志太乃波加万  
と有る志多母と云訓の有ハ下裳と云事ふり又志太  
乃波加万と云も持鼻禪ハ履が如くして結る物ふれ  
ハ波加麻と云るふて何れも裳と云言の離れざるを



思不可又裳ハ女の装束ふる故ハ打任せて云事ハ  
 母下裳ハ記傳ハ御湯具の事ハ御湯具ハ御湯  
 母自ふハ申侍る云御湯具ハ御湯  
 小其小別ハ申侍る云御湯具ハ御湯  
 目も有ハ下裳ハ有けるハ開ハ神ハ古事記ハ飽ハ昨ハ之ハ字ハ斯ハ  
 飽ハ物ハの度ハを過ハすハを  
 歎雖不足十二ハ丁ハ小荒津左右送來飽不足社十三ハ丁ハ  
 九ハ丁ハ小土打哭杼母飽不足可聞十九ハ丁ハ七ハ小伊夜奈都可  
 之久雖聞飽不足又ハ丁ハ今日耳飽足米夜母二十ハ丁ハ

△常陸風土記ハ多珂郡ハ馬具道ハ前里ハ飽ハ田ハ村ハ古ハ老ハ傳ハ具  
 天皇云ハ獵漢已畢ハ奉ハ至ハ御湯具ハ時ハ勅ハ傳ハ從ハ日ハ之ハ遊ハ朕ハ  
 與ハ家ハ后ハ各ハ就ハ野ハ海ハ同ハ幸ハ祥ハ福ハ裕ハ語ハ曰ハ野ハ物ハ雖ハ不ハ斷ハ而ハ離ハ嘆ハ飽ハ不足ハ香ハ裳ハ五ハ丁ハ七ハ小  
 味ハ盃ハ飽ハ喫ハ者ハ後ハ代ハ追ハ跡ハ各ハ飽ハ田ハ村ハと見ハえハがハ飽ハ喫ハの言ハ是ハありハ  
 阿ハ岐ハ太ハ良ハ奴ハ比ハ波ハ家ハ布ハ尔ハ志ハ阿ハ利ハ家ハ利ハ十二ハ丁ハ小相見久

小安我毛布伎美波安伎太良奴可聞ふハ多ハくハ飽ハ足ハ  
 と言續け又十四ハ丁ハ小毎日聞跡不足音可聞十二ハ丁ハ  
 小見常不足君尔所贈而ふハ足ハを阿久ハとハ訓ハりハ名ハ義ハ  
 飽ハを阿久ハとハ訓ハりハ名ハ義ハ  
 須ハ具ハ流ハとハ有ハ義ハ小當ハりハてハ足ハ字ハふハもハ同ハじハ義ハふハりハ  
 然ハれハバハ此ハ小開ハ神ハとハ有ハもハ口ハをハ開ハきハてハ嚙ハふハ義ハふハるハが  
 物ハを嚙ハふハ多ハ少ハ共ハ小口ハをハ開ハくハ常ハふハるハをハ殊ハ小開ハ字  
 を書ハれたハるハ飽ハくハ迄ハ嚙ハふハとハ云ハ意ハをハ示ハせてハ書ハるハ者ハふ  
 る可ハくハ又ハ飽ハ昨ハのハ昨ハ字ハもハ記ハ中ハ小以ハ爲ハ昨ハ破ハ吳ハ公ハ唯ハ出ハ又  
 獻ハ天ハ之ハ眞ハ名ハ昨ハふハとハ皆ハ喫ハ字ハ食ハ字ハのハ義ハ小用ハひハたりハ然ハれ  
 飽ハ昨ハとハ飽ハくハ迄ハ食物ハをハ食ハりハ食ハひハてハ病ハをハ生ハせるハ神

△此事ハ猶傳十九  
 卷三百平六丁小  
 此神の説有て其  
 引る論語證  
 而篇ハ君子食  
 無求飽ハ居ハ無  
 求ハ安ハ云ハとハ有  
 也食ハ飽ハとハ云ハ事  
 の例あり

△字書ハ昨嚙也  
 マ見えたり



△六十五  
丁今耳三秋  
足目八方

思不可又裳ハ女の装束ふる故小打任せて云事不  
母下裳書く此ハ御湯具の事御湯具右宮名目抄小御志多  
母自ふ申侍る云有女ハ表ハ着る裳有る故  
小其小別たむ為小下有云る可し有ガ如く  
れども右云る如く男小も袴を裳て云ひ其小分た  
目も有小有ける○開齧神ハ古事記小飽咋之字斯  
能神名義ハ飽咋の字の如く飽ハ物の度を過すを  
云ふ万葉ニ三十三丁小卧居雖嘆飽不足香裳五十七丁小  
阿岐太良奴比波家布志阿利家利七十二丁小相見久  
歌雖不足十二丁小荒津左右送来飽不足社十三丁  
九丁小土打哭掃母飽不足可聞十九丁七丁小伊夜奈都可  
之久雖聞飽不足又十三丁今日耳飽足米夜母二十丁

△此事ハ猶傳十九  
卷三百平六丁小  
此神の説有て其  
カ引る論語澄  
而篇ハ君子食  
無求飽居無  
求安云と有  
と食飽と云事  
の例あり

△字書小咋噓也  
マ見えたり

小安我毛布伎美波安伎太良奴可聞ふ多ク飽足  
と言續け又十四丁小毎日聞跡不足音可聞十二丁  
小見常不足君尔所贈而ふ足を阿久とも訓り名義  
飽を阿久とも阿伎多流とも訓るハ字小當れるを又  
須岡具流有義小當りて足字ふども同ト義ふり  
然れバ此小開齧神と有も口を開きて噓ふ義ふるガ  
物を噓ふハ多少共小口を開くハ常ふるを殊小開字  
を書れたるハ飽く迄噓ふと云意を示せて書る者ふ  
る可し又飽咋の咋字も記中ハ以為咋破吳公唯出又  
獻天之眞名咋ふ皆喫字食字の義小用ひたり然れ  
ハ此神ハ飽く迄食物を食り食ひて病を生せる神

○日本書紀傳十

○二百三十六



今又和泉志云道  
 守神祠在塚南左  
 之云ハ泉守道  
 者を祭れる由  
 有を思ふ可和泉  
 志ハ住吉舊記曰  
 云ハ爲住吉之外  
 官故朝廷二十年一  
 度毎造替住吉社當  
 社亦造替元開口村  
 水戸村原村之間也故  
 俗稱三村大明神云々  
 之云リ神名帳頭書  
 カン兼永點本割曰  
 此其蓋爲開嚙神  
 之云るを思合す  
 可

間

の首領ふりて知べし神名式ハ和泉國大鳥郡開口神  
 社有ハ此神ヲ若然バ其魂を祭和めたる小て上ふ  
 る泉津醜女を出雲國筑陽神社ハ被祭たると其致一  
 なる小や其社今塚津ハ在て三村大明神と申す由ふ  
 るガ其塚ハ疫神を祭れる地ふるをも思合す臨但  
 時祭式ふる畿内塚十處疫神祭の中ハ漏たり者右  
 の三村明神を事勝國勝長狹神を祭れるを後ハ生玉  
 明神牛頭天王を合祭る由ハ云リ予思ふハ事勝國勝  
 長狹神ハ猿田彦神と云ハ異説有ハ依て云ふハ  
 此ハ塚ハ疫神を祭るハ嚙神を祭れるを思僻めた  
 る説ふる可ト生玉神ハ大己貴命ふる申す祝詞講義  
 何クヤ小註るガ如ク牛頭天王ハ備後風土記ハ依ハ  
 素戔嗚尊ハ坐ハ又疫疾を守給ハ神ハ坐セバ嚙神  
 小合祭れるも由有リ何れハ抑食物ハも弟十  
 も事勝國勝長狹神ハ云事心得テ

一書保食神の身より成れる物を悉取持去て獻れ  
 る所ハ于時天照大神喜之曰是物者則頭見蒼生可食  
 而活之と見えたる如く天下の蒼生の身命を有つ可  
 き珍宝ふり然れども己ハ所見たる伊弉冉尊の如く  
 尊ハ大神ハ坐す食泉之竈の事ハ依て頭國ハ出返  
 せ給ふ事の出来坐す成て諸の禍事ハ其より起れる  
 事右ハ所見たるガ如ク又古語拾遺ハ昔在神代大地  
 主神菅由之日以牛完食田人于時御歳神之子嚙饗而  
 以狀告父御歳神發怒以蝗放其由苗葉忽枯損似篠竹  
 之有リ此ハ亦食の穢ハ依て甚ハ福事ハ成れる



噉

△天上の儀式ハ右の如く食シ小シ嚴シを被レ泉國ニ於テ其ノ異ニ於テ亦シ見レた蒲ノ陶ノ省ノ成ルれルヤハ不レ語ル女ノ採ル味ニハハ賤ニミシ狀ニ於テ思フ可シ

△於保奈奈年知命乃美已止仁

ふり所以小天照太神の皇御孫尊小瑞穂を授奉りて  
給ふ所の大御言小以吾高天原所御齋庭之穂亦當御  
於吾兒々詔給へる事天孫降臨章弟二一書小出たり  
如此く齋まはり清まはりて慎し給る時ハ宴小活  
て活べき物ふりと雖も飽く迄此を食ふ時ハ又其反  
ふて身命を損ふ事常多在り此其度を過せる災ふり  
善事悪事の悪事も此と同一道理小被茂槍の本未  
頃けず中取持て行ふハ善事小有れども其も物  
頻りて其度を過せるハ禍事も成る所由下ふるハ  
十狂津日神の所小傳せるを見て辨ふ可き者ズハ  
大同類聚方ハ古迺美波阿萬乃保乃計都知味豆阿治  
乎奈伽和太仁伊連伊太須古登乃太要那流乎都倭止

之底曾能奈訶美仁万都比禿倭邪奈須裳奴乎耶麻比  
止伊布ハ有る阿萬乃保乃計ハ唯ホケ火氣ト續ミたる如  
くふれども実ハ火ト火トニを云事上ハ丁ハ小註リハ都知  
ハ土毛ハ食ト成ル物ヲ云ふり阿治ハ古書小味字  
を書て即食味の事ふり此を中藏小入出す事の絶ズ  
る其人の平生ツふるを其中身小纏ヒて災成す物を耶  
麻比と云とふり此ハ飽ク事ヲ云フれども奈訶美  
仁万都比禿と有ふハ食味の滞れる小本著たる事著  
明く其ハ上小引る少彦名命乃美古登仁阿旨解王耶  
阿旨阿治味差乃不太津者耶麻比乃門止帝別と有る

日本書紀傳十

二百三十八



以て其と知るるふり此小阿旨阿治と有るるハ  
毒物ふても喰ひ禁忌の物小中るれたる如く見ゆれ  
ども然小非ず毒物不在れ禁忌の物不在れ何小依ず  
口中小入て人身を犯る病しむるを云れば右小云る  
飽咋ふむ其病の本ふりける又阿治咏歌致と云ふ一  
章有り仁我理須婆哩。鞍  
麻歸新武喜。新褒波遊岐。盈俱刹。阿波紀。と六種小分て  
其能を云り其ハ藥物の事ハ有れども常の食味小  
至ても同事ふり其次小万太。阿志阿治袁叱囉比天。伊比布具  
餘利。保乃記能甫之。母屠須治仁通太比先。美鳥知二非  
路支。咏差奈之奈夜鬪須母濃乎。哪訶耶麻日止伊婦奈  
刹。マ有ハ惡味を喫ひて脾胃より火氣上る本筋小傳

ひ身内小弘び災成し惱ます物を中病と云ふりと云  
事ふて謂ゆる身腹中の諸病ふるふり然れば其次ふる  
味座乃倭訶知と有る中ふて能民區日阿太利又致乃  
味座又保豆稔乃於止侶陪と有ふハ皆右の惡味災  
の屬ふり文小能美區比阿太利者。阿之母乃太之味。久  
累比阿波世。阿延流蒙能阿多刹。阿之萬自要母乃久囉  
日。マ有て飲食中りハ惡物畜アヒモクと喰合アヒモクと和物中アヒモクと惡交  
物喫との四ふり次ふる血之災と髓之衰とを食物小  
係る事ハ第二章小美豆保乃計乃不多通乎加波世。保  
豆祢奈理。知之保奈利。云々と有る第三章小保乃岐波



故比豆美豆阿治乎訶母延て見え弟四章小美豆波能  
民區日乃安治萬計奈刹。云々伊路味底。知士甫登奈刹。  
云々見え弟五章小蕃豆波致旨補乃須俱喇有字滿記  
乎云々有て何れも食物を本て為て成れる者ふれ  
バふり此等も皆飲食の度を過せると食ふまじき食  
味を貪り喫へると小由て起れる病ふれば是を以て  
右等の類ハも此ふる開嚙神の司る所ふりとい云  
ふり但今ハ漢土西洋の醫説セ小多く行れて有り其  
御典を説奉るを任て爲る此大業を拘へふぐ然る  
未くの技國の説共小合る合ざるを云べき事ハ己  
小右の三神の事小就て素問以下の外書を以て論  
徴したる説も有らざるも今此説の成れる就て悉捨

る小ハ至れ  
るる長者ウシふる事上小註せるが如くふるを古事記小  
ハ右文小續て次於投棄左御手之午纏所成神名奥疎  
神次奥津那藝佐毘古神次奥津甲斐辨羅神次於投棄  
右御手之纏手所成神名邊疎神次邊津那藝佐毘古神次  
邊津甲斐辨羅神と有て此六神の名出たり此小ハ何  
れの一書の傳小も見えざれとも此第六一書ハも  
大凡古事記と同ト傳ふるを此小成れる他神等の事  
ハ打合る小此小至て甚足ぬ心ふむ爲ける故借考る  
小右の古事記の文ハ必此小在て傳れり心むを如何



〜てり漏たりし者と所見たり予已く説を得て右ふ  
る三神ハ疾病神ふる此の六神ハ海陸小就て禍事を  
成し行ふ神ふり然れハ此小説示さずしてハ此ふる  
始終の結を爲難き故小註さむ但其説ハ記傳六  
れてハ有けれども予が説ハ其トハ大右小投棄給  
異ふる故小殊更今言擧爲る者ふりハ御帶御衣御禪の三ふり此小又左右御手の手  
纏と合せて此五をぎ泉門小擲給へりけむ其外小も  
御杖ハ此より以前小投給へれば此の列小非ず又古  
事記小御裳の事有れども其ハ御帶ふり傳の誤ふ  
る由上ふる投其帶の下小論へるが如く又於投棄御

冠所成神名飽咋之宇斯能神と有れども其ハ此小又  
投其禪是謂開嚙神と有る方正しければ其御冠と云  
ハ前小取黒御鬘投棄と有る其事の別ふる物の如く  
傳れるふる可き瑞珠盟約章ふる天照太神の御裝束  
小以ハ坂瓊之五百箇御紵纏其鬘鬘及腕と有て玉よ  
り外小ハ御冠小當れる物無を思ふ可し出雲神賀詞  
小伊都幣能緒結天乃美賀氣冠天と有を以ても上古  
小冠と云ハ後の冠又幞頭ふどの状ふりざりし事ハ  
知るるふり若て又此小ハ又投其履是謂千敷神と  
有る履ハ然も有ふむを千敷神ハ古事記小依小伊邪



那美神の赤御名ふれが此ハ傳の異ふるふれが此ハ  
 在ハ誤ふり其ハ下云事ハ有れやも此ハ云云  
 多きハ依て止事○手纏ハ記傳六五丁ハ仁徳天皇五  
 十五年御紀ハ田道てハ人の蝦夷と戦て死所ハ時  
 有從者取得田道之手纏與其妻乃抱手纏纏縊死万葉  
 十五丁<sup>十三</sup>ハ和都美能多麻伎能多麻乎云ハ三代実  
 録ハ貞觀十二年正月十三日勅充壹岐嶋甲并手纏各  
 二百具ふど有り和名抄ハ射藝<sup>具</sup>頗<sup>具</sup>小韞和名多麻岐  
 一云ハ手也と有り実ハ後云ふハ手<sup>ハ</sup>の如ふる物と  
 聞えたり但射藝耳の具ハ成れるハ後の事ふり上代

ハ常ハも着る物ふりさ<sup>マ</sup>見えたり又此ハも玉を  
 纏附たりけむ事ハ古事記御宇氣此段ハ亦於左右御  
 手各纏持ハ坂<sup>勾</sup>瓊之五百津之美須麻流之珠と有ハ  
 て灼然<sup>ハ</sup>此ハ手纏とハ無れども次ハ曾毘良迹者  
 負千入之韞附五百入之韞云と有ハてハ実ハ後世  
 の小手の狀ハ似通へハふり<sup>右</sup>の万葉十五ハ多麻伎  
 不可<sup>ハ</sup>矢孫本紀饒速日命の形見物の中ハ天羽<sup>ハ</sup>弓  
 天羽<sup>ハ</sup>矢復神衣帶手貫三物と有る手貫を多麻伎と  
 訓たり名義抄ハ韞字<sup>ハ</sup>和名抄の如く多麻伎又俗云  
 古氏<sup>ハ</sup>有る外ハ多加陀奴伎とハ牟須夫とハ有り又  
 鷹韞<sup>ハ</sup>多加陀奴伎と有ハ鷹手貫と云事又記傳ハ是  
 ふる可<sup>ハ</sup>然れハ手纏を手貫とも云ふり又記傳ハ是  
 を手結とも號け<sup>ハ</sup>ハヤ万葉三<sup>三十一</sup>ハ丈夫乃手結我

△れども字の如く  
 多奴伎と訓び  
 ふ



浦々續け詠り足ふるを安康天皇御紀歌ハ阿由臂能  
古輸孺雄略天皇御紀歌ハ阿遙比那陀須慕と有て脚  
帶こ云れハ手ふるをも然ハ云けし師云西宮抄五月六月  
條ハ諸家出馬衆人著ウチカケ禰福錦袴甲手纏足纏と並云る  
足纏ハ阿由比と訓べけれハ手纏も多由比と訓べし  
事灼然と云れ今思ふハ万葉ハ右の如く續けた  
るハ手纏の意ふれハ手纏をも即多由比と爲じも物  
ハ違ハズ一ふり然れども名ハ別ふる可し若多由比  
ふハ此記ハ手結と書へきを纏字を書るハ多麻  
伎ふる故ふり此記の例皆然り其上万葉十五又和名

抄ふハ多麻伎と有るや唯同物ハ二名有るふり  
けり補意と有り猶上ハ云る手貫と云名も有れハ合せ  
て三名有ふり右ハ師云と有ハ冠辞考の説ふるハ就  
行幸裏書ハ諸衛督將佐以下著狩衣胡録腹纏ハ手行  
膝と有を合せ見てハ手纏ハハ行膝ふる事  
知れハ○奥疎神邊疎神記傳六五十一ハ先左の御手纏  
ハ成れる三神を奥と云ハ右のハ成れる三神を邊と  
云ハ云儲左を奥ハ當るハ師説ハ万葉九二十ハ吾  
妹兒者久志呂尔有奈武左手乃吾奥手ハ纏而太麻師  
手と有る即此意ふりと云れハ依ハ左手を奥  
手と爲るふり儲右ハ邊ふる事灼然ハ砌も邊の意ハ



叶へり又萬事を先右手して爲るも左ハ奥ふるが如  
し諸の山津見神の成坐るも左手ハ志藝山津見神右  
手ハ戸山津見神ふり此も此の奥と邊と合へり儲  
於伎と於久とハ同言ふり邊ハ端方ふり波志を切て  
此と成り此倍を切めて閑と成れるふり故海邊を宇  
那備濱邊を波麻備とも古諺ハ詠りて有り此ふて左  
右の奥邊ふる事明らうふれども猶言義詳ふらざ故  
思ふふ於久ハ置ふて物の動らざる由ふて邊ハ經ふ  
ふ又静ふらざる意ハ言本ハ動静ハ依れるふる可  
し其ハ此を大きく云時ハ奥ハ別天ふて常ハ静ふる

を邊ハ日天ふて常ハ運旋るふるが體ハ取ても別天  
ハ大きく日天ハ小さけれバ邊ハ大小の形を備へた  
り十種神宝の中ハ奥津鏡邊津鏡と云るも大鏡ハ鏡  
書ハ奥津某邊津某又此を取て天日と大地とふり天  
日ハ一も天の中央ハ居て終古ハ易らざるを大地ハ  
くも其周圍を公運して一歳を爲し自己の私運して  
日夜を分てるふるが天日ハ動ずして静ふり大地ハ  
常ハ運旋る故ハ神名ハも浮經野豊買尊ふらば申せ  
り此も亦天日ハ奥ふり大地ハ邊ふるふるが遠近大  
小の事ハ上の例ふて異無し但天日を奥と云例ハ地  
れども其奥と云ふ左ハ



古くも日足と云る其如くふて天日の移るハズして天中ハ係れるを云ふれハ奥と云ふも合り又大地を邊と云例も無れども常ハ國ハ又刻して海ハ奥と云國方と云ハ邊ふるを思ふ可し又刻して海ハ奥と云ひ邊と云事此ハ常の事なり奥ハ人の往來ふ處ありざるを邊ハ常ハ人の歩行く處ありバ又動靜大小遠近の義を離れざる事上の如く若て山ハ奥山と云る其小對へて端ハ山と云り端ハ邊ふる事右ハ引る記傳の説の如く又萬事を爲すハ右手を動し運びて物爲るを左手ハ唯添る計ふるが如く此を以て奥邊ハ本動靜ハ依て起れる言ふるが始ふて遠近大小の義ふる事を曉り明し可き者なりう一級長戸邊

命の傳ハ云る事をも又考合可者なり疎ハ記傳六五丁ハ古書ハ多く放ス離字ハを訓り今言ふも遠奢加留と云即其意なりふり佐加留ハ佐久留ハ自然と物を然爲るハの差別有し見えたり神功皇后御紀ハ神の御託言の中ハ神風伊勢國之百傳度逢縣之折折鈴五十鈴宮所居神名撞賢木嚴之御魂天疎向津媛命焉と有ハ皇太神の荒魂ハ荒祭神の御名ハ其天疎の疎も同ハ事なり一傳ハ向ハ遺男聞ハ龍衣大歷五神魂速狹騰尊ハ有ハ同ハ速狹騰ハ速疎ハ云義ふる故ハ時天皇謂ハ皇后曰聞ハ惡事之言坐ハ婦人乎何言速狹騰也と尤め



こせ給へるを以て考ふ可く若て征韓の御政事畢て  
返給ふ所ふ天照太神誨之曰我之荒魂不可近皇后當  
居御心廣田國之教誨給へるふ依て御許を疎くせ御  
在り坐むと云事ふり近字ふ此べて言義を思ふ可き  
者ふり此天疎向津媛命と申す御名を先等の説ふ皇  
太神の御身自御名告坐る御名として本御名  
と定たるハ非ふり下小我之荒魂不可近皇后と有る  
思漏され又五十鈴宮所居神と云ふ耳眼を著しれた  
る者ふり下ふるハ小柱津日又第十七書小泉津事解  
神の傳ふ説明しむ可きふり又第十七書小泉津事解  
之男神と云神の有も伊弉諾尊の族離ウラハサレと宣へる驗ふ  
依て成坐る神ふる事上百九十ふも粗説たる如く又  
天孫降臨章第一一書ふる天稚彦條ふ時有國神号天

探女を正書ふ天探女此云阿麻能左愚謎々註せるを  
古事記ふも天佐具賣と有て具ハ濁れる言ふれども  
其も疎の意ふる可し和名抄鬼魅類ふ日本紀云天探  
女和名阿萬一云安萬乃と有て此ふハ二共小佐久と  
佐久女清り備此を鬼魅類ふ被載たるハ承る所有て爲し事  
と通えたり記傳ふ今世諺ふ天之佐古と云ハ此名ふ  
り左ふ右ふ人ふ悖ひて心悪しき者をふむ云めると  
云れたる此ふ就て思ふふ天稚彦ハ天ふて壯士ふ擢  
しれたる神ふるが此國ふ降着しより然る鬼魅ふハ  
交々して終ふ此國を得むと思成て種々の逆事を



糸角卷の何れ此  
 世人の云めり恐ろ  
 しく神を託奉つ  
 らむと違ハ打透  
 て変形無け云  
 成す女有り又甚  
 切狂く何ぞの  
 物ヲ託せ給ハ云  
 こと有を細流の  
 世俗の謬小塚す  
 可き時過ぬれバ  
 神の憑とす万  
 葉集ニテ大伴安  
 麻呂傳大細言巨  
 勢人女歌玉葛又  
 古實生ぬ木ハ道  
 運振る神ヲ憑と  
 成ぬ木毎と云ハ  
 能因歌枕ハ人ハ  
 避る神を荒御  
 前又荒御靈日  
 と云ハ荒神なり  
 一云ハ云ハ下三  
 百五十ニテ老合す  
 可一又落定注物  
 然下ハ人の思ハ中  
 前

成せるを皆其天探女が所為ふり若て天より無名雄  
 を降して令看給へハ言進めて射殺させ其返矢小中  
 りて天推彦を終小七不させたるふて天推彦の侍婢  
 の如く化居て物為たるふり此を以て天探女の佐具  
 と此の奥踈邊踈の踈と同意ふりハ云ふり今昔物  
 語廿四段ニテ小年来住ける妻を本離サレカふけりと有る其  
 小て人ふも物ふも交こり居つ本離サレカれ令る謂ふり源氏  
 卷小甚佐久自理老すげたる人立交りて云ハ有を  
 細流小賢く指過したる心ふりハ有ハ天探女の狀  
 言痛き者ハ云ふり又右の踈を祝詞ハ守登夫流  
 云り祈年祭詞ハ踈夫留物能自下往者下守自上往

然下ハ人の思ハ中前ハ大事ハ非すやと云ハ云ハ云ハ有ハ荒御前の託たらしめて云ハ云ハ云ハ又

者上守と見え御門祭詞ハ四方四角與踈備荒備来  
 武天能麻我都比登云神乃言武惡事ハ相麻自許利相  
 口會賜事無久自上任波上護利自下任波下護利待防  
 掃却言排坐兵と有り又道饗祭詞ハ根國底國與鹿  
 備踈備来物ハ相宰相口會事無兵下行者下守理上  
 往者上守理と見えたる踈備ハ踈くく狀を云ハ  
 荒備も散くく狀を云て此踈留物夫と云ハ根國底國  
 の汚穢ハ依て成れる荒ふる惡く神ふる故ハ其を  
 禦給ふ神等も成坐て其を守給へハ中ハ散ハ居て  
 得ざるを其守給ふ虚際入キニを伺て入て犯さむと爲る者



△多葉十三吹風母  
和者不吹立浪母  
不立跡と有りハ跡  
を於保云々

ふり此を以て奥跡神邊跡神の名義をも又知ふ足れ  
る者ふり天孫降臨章第二一書小高皇產靈尊勅大物  
主神汝若以國神為妻吾猶謂汝有疏心故今以吾女三  
穗津姬配汝為妻宣領八十萬神永為皇孫奉護と有る  
此小て親跡の差別能知くるふり名義枚小跡字を  
宇登斯とも宇都  
富那理とも於曾加那理とも余曾とも訓る字を佐  
加理小用ひたるハ其心同しき故ふり跡と疏とハ  
同義の字小て名義枚右の如く訓る外小比良久と  
も登保斯とも能叙久とも訓る義をも合せ考ふ可  
き者ふり○奥津那藝佐毘古神邊津那藝佐毘古神ハ何  
れも男神ふる小女神の對無し那藝佐ハ海邊ウベマふり海  
宮遊行章小以草草裏裏兒棄之海邊と有て其生坐る御名

を彦波瀲云々と称奉れるを以知べし古事記ハ其  
を海濱波限と有り和名枚涯岸類小渚一溢一否曰渚  
和名奈と見え万葉十三六ハ清波瀲六  
木左ニニ丁丁小清瀲とも書り言義ハ  
波段ハ小て海濱小波の打寄セたる跡ハ段ハ成せる  
者ふればふり物を刻むと云も段を成す謂ふる事已  
小上ふる為三段の下小云り物小名残と云ハ浪の引  
たる所小跡を残せるを  
以云ふり斯れハ那美伎陀の  
切りて波瀲と成れる事著し右の如くハ唯何と無き  
海濱の神の如くふりと雖も上ふる奥跡邊跡二神の  
例を以思ふ小元より穢れたりし物実小依て成れる  
神小一坐セハ共小福神の属ふる可き事云も更ふり



故思ふ此ハ川澤江海小就て妖事を爲せる神ふり  
けり瑞珠盟約章素戔嗚尊昇天の所小湏瀆以之鼓盪  
山谷爲之鳴响と有る如きハ其神性の雄健小依れり  
と雖も其小應ふる神有て使然るふる可と思ふ可し  
又其を古事記ハ青山如枯山泣枯河海者悉泣乾と  
有り此小依て思ふ小河海を悉く泣乾して何處迄も  
波激の如く成せり故を以て耶藝佐毘古と云名ハ  
有ふりけり此神等ハ黄泉國の穢小觸たる物小因て  
成れるを伊弉册尊小属奉給ふ素戔嗚尊の所行を資  
けて當昔荒び踈びけむ事の状をも又思ふ可し又其

傳世一詩小注  
るが如く

那藝佐小泣爲の義をも兼たる可し右の鳴响又ハ泣  
乾枯泣乾ふぞハ山海共小通ハして云るふれども殊小  
湏瀆の鼓盪へる状の甚しく有けむと所思れがふり  
那藝佐の藝ハ濁音那久の久ハ清音ふれども浪段と  
云本より見れば上古ハ共小清たりけむ事云も更ふ  
り皆那藝佐ハ那久とを一小爲て云るハ何と思ふ  
人も有ふれども己小註せる如く時置師神ハ御帯を  
解置せる小依て成れるを時犯神ふる如く又天孫降  
此段小成れる神等の名小ハ多在る例ふり又天孫降  
臨章小彼地多有螢火光神福及聲福邪神と有も山海小  
て妖を爲す神の所爲ふり出雲神賀詞小晝波如五月  
蠅水沸支夜波如火火光神在利石根本立青水沫毛事  
問天荒國在利と有る晝波如五月蠅水沸支の一章ハ

○日本書紀傳十

○二百四十九



全く海水の方へ依れるふて如五月蠅ハ水の沸騰る  
狀の常ハ波の立る狀ハ異ハして水玉の群がり飛  
か五月の蠅の如く成しとふり古事記ハ皆涌と有ハ  
惡神之聲と有れども天孫降臨章第六一書ハ晝者如  
五月蠅而滯騰之と右の水沸伎と共ハ允當れるふり  
若て次ハ青水沫モ事問と有ふ彼泣枯泣乾ふとの  
類ふて有べけれハ那藝佐を泣爲と説くハ僻事ハハ  
非る可くふむ然るハ事問ハ有ても正しく人の言  
語ガ如クハ非ずて唯泣ガ如ク响るガ  
如く聞えたり事ハ○奥津甲斐辨羅神邊津甲斐辨  
羅神の辨羅ハ女等ヲふて女神と聞えたるが狀ハ男

神の對無き事上ふる那藝佐毘古ハ女神の對無ハ似  
たり備甲斐ハ大殿祭詞ハ今奥山乃大岐小岐ハ立留  
木子云くと有て山間ふる木の生る所を云ふり古事  
記朝倉宮段大御歌久佐加辨能許知能夜麻登多美  
許母幣具理能夜麻登許知基知能夜麻能賀比多知  
邪加由流波毘呂久麻加斯ハ有ふて山ハ山と狀ハの  
山間ふる所を岐カと云事灼然ハ雄略天皇四年御紀ハ  
丹谷を多迹加比と訓る多迹ハ多理ふて水の流ハ就  
て云ひ加比ハ間みて山の形ハ就て云ふ其二を合せ  
たる者ふり皇極天皇三年御紀ハ谷此云波佐麻ハ有



△又女陰を俗に  
加比と云も其岐ふ  
る所を在ると云ふ  
可

岐

ハ岐の意も同じと云ふり和名抄ハ岐山間陝處也俗云  
山乃加比と有り記傳ハ甲斐國も山間國と云事あり  
乃加比と有り備魚貝ハ加比と云也其岐の如く凹め  
る中ハ肉有を以て云ふる可くや又ハ穀と穀とニ合  
る由ハ辨羅の辨ハ女羅ハ等ハて等々ハ女神ハて  
相並べる由ハる可く山の岐ハる處ハ女の陰處の如  
くハる故ハ此を富登と云り古事記淳穴宮殿ハ御陵  
左岐火山之美富登也と見えたるを懿德天皇御紀ハ  
ハ葬磯城津彦王子着天皇於岐傍山南御陰井上陵と  
有を以て岐を富登と云事有を知べし記傳ハ辨ハ方  
置ハ助辭ハて例多ク中ハ万葉十四廿九下ハ與許  
夜麻敷呂と有ハ横山方ハて此呂と同一と云れたる

ハ実ハもと聞ゆれど此神の岐を成す所由ハ此正書  
も此考ハ合さるふり  
ハ青山變枯と見え弟二一書ハも青山為枯と有り又  
古事記ハ其を青山如枯山泣枯河海者悉泣乾と有  
ふハ素戔嗚尊の御荒ビハ依れりハ雖も又其ハ應  
ふる神有て使然る事己ハ甲斐辨羅神の下ハ註るが  
如く又甲斐辨羅ハ岐女等ハるが其言ハ辨羅ハ滅ハの  
義を含めて青山を枯山成せる意有れば此ハ決く山  
ハ就て岐を成せる禍神と聞えたり己ハも引る万葉  
ニ丁ニハ玉葛実不成樹ハ波子般破神曾著常云不成  
樹別ハと有が如く本草ハ実の成ざるハ一速ハる



神の所爲ふれば況て青山變枯ふでハ荒ぶる神の所  
を得て物爲けし事云も更ふり 又物の所詮有るを(加)  
甲斐無しと云る甲斐ハ詮字ハ當る可し 中古の書共  
ハ甲斐無し言甲斐無しふと云甲斐ハ疑字の義ハて  
譬ふ易べき物無しと云る意ふり云説有ハ然も  
有ぬ可き事ふり然れハ此の神名の徴ハ立難し  
又天孫降臨章ハ有螢火光神及蠅聲邪神復有草木咸  
能言語と有る蠅聲邪神ハ上ハ云る如く海水ハて妖  
を成せる 甲斐<sup>那藝</sup>佐毘古神の所爲ふるハ合せて山谷ハ  
て妖を成すハ右の螢火光神ハて甲斐辨羅神の所爲  
ふる事知らるしふり出雲神賀詞ハ夜波如火光神  
在利石根木立青水沫毛事問天云く見えたる此ハ

山ハ無れども山ハ常ハ鬱火在て燃上り又妖火  
の出て人ハ災爲る以て知れ又石根木立の山ハ屬  
る物ふるを以て考れば山岳陸地ハて有る禍神の首  
領と云者ハふむ有ける 上ハ那藝佐毘古神の川澤  
も合せて考ざれば心行き難 ○右件ハ神ハ此御紀  
事こり多うとめと思ゆ ハ漏されたるを殊更ハ古事記より引出て説く事  
ハ彼時置師神煩神開嚙神の三神ハも病神ハて此  
ふる奥疎神邊疎神奥津那藝佐毘古神邊津那藝佐毘  
古神奥津甲斐辨羅神邊津甲斐辨羅神六柱ハも禍  
神と云物ハて共ハ伊弉諾大神の泉國より歸せ御



在り坐し時御身小著る物を黄泉坂小擲給へりし小  
依て成れる神あれバ頭國の神の如くあれバ其物  
實ハ彼醜國の汚穢小依て成れる神等ふる故小伊弉  
冉尊小屬て此も亦黄泉神ふる故小祝詞ハ病ふる  
をも禍ふるをも押括めて根國底國與鹿備 疎備 采物  
マハ云るふり 其ハ世を守給ふ正しき神の限りハ此  
國小て生坐しも高天原を本處と爲給  
へると同日 其爲小其泉坂小塞れりし千人所引磐石  
の御靈をハ衢比古ハ衢比賣神と申し又其御杖を投  
給へりし時小成坐るを岐神と申して其神等を防ぎ  
却御ひ在る事道饗祭と云事の起れりし本ふるふり儲

右の疫神ハ人も人小就て災を爲す者ふるが故小療  
病禁厭の事を以て此を掃却ふ方法出来れり宝劔出  
現章第六一書小夫大己貴命與少彥名命戮カ一心經  
營天下復爲頭見蒼生及畜産則定其療病之方又爲攘  
鳥獸昆虫之災異則定其禁厭之法是以百姓至今咸蒙  
恩恩頼と見えたる是かり此小鳥獸昆虫と云ハ疫神  
とハ別ふるが如くふれども其人をして令病る者ハ  
其靈を物小託て災異を爲るふり上ふる時置師神の  
傳小引る大同類聚方小母能乃解者万自故俚ハ太毛  
乃解多訶可味乃々て有を以知べし然れバ右の時



置師神煩神開嚙神等の災異を攘ひて疾病を療むる  
道ハ已ハ大己貴少彦名二神の神功ハ定れる者ナリ  
又其道饗祭ハ一も元來其大己貴命の事始テ高天原  
ハ奉ルセ給ヘル政事ハ其より皇御祭尊の大朝廷  
ハ傳ハれる由慥ハ見テ所存テ其講義ハ其禍神をも  
己ク説るを又天孫降臨章ハても云ベシ其禍神をも  
大己貴命ズ言向知ル給ヘリける右ハ引る一書ふる  
其神の御言ハ夫葦原中國本自荒芒<sup>至</sup>及磐石草氷<sup>木</sup>威能  
強暴然吾己權伏莫不知順と所見たる是ナリ然れ  
も其ハ岐神の神成<sup>威</sup>を得テ物為給ヘル事天孫降臨章  
ハ大己貴神白於二神曰故吾亦當避如吾防禦者國內  
諸神必當同祭今我奉避誰復敢有不順者乃以平國時

所杖之廣<sup>二</sup>神曰吾以此<sup>二</sup>予卒有治功天孫若用此  
予治國者必當平安之有を以知ベシ前ハ磐石草木ハ  
至迄ハ取託テ荒芒ナリ一神を悉權伏テ和順給ヘレ  
バ然る禍神も大己貴神ハ從ヒ居ナリ一ナリ而る  
ハ今皇御孫尊ハ國土を避奉給ふハ就テハ岐神の神  
威を得給ふハ非ズテハ然る神等をハ治させ給ヒ難  
けむとて廣<sup>二</sup>予を奉ルセ給ヘルハ其ハ岐神ふる事  
上<sup>二百</sup>下<sup>十</sup>ハ註セるを合せ考ふ可キ事ナリ然れども  
ハ天探女ガ如キ禍神有テ天稚彥ハ相交り相口會  
テ其神を忠誠ふる事ハ神ハ成して終ハ高津鳥の死  
ハ依テ身亡たり一事ハ有けれハ全クハ右の二神經  
津主神武甕槌神ハ悉クハ言向知ル鎮給ヘル事下



ガ云ル故其弟二一書ハ右の廣予の事を乃薦岐神  
於二神曰是當代我而奉從也と見えたり如吾防禦者  
國內諸神必當同御と有と代我而奉從と有とを合せて  
岐神の力を合せて禍神をも壓へ御在り坐けむ事  
を知べきふり儲又次ハ故經津主神以岐神爲郷導周  
流削平有逆命者即加斬戮歸順者仍加褒美と有と正  
書ハ於是二神誅諸不順鬼神等果以復命と見えて  
岐神を郷導として削平給へるを鬼神と云り鬼神ハ  
くも黄泉國の汚穢ハ成れる右の疫神禍神を摠て云  
る事遷却崇神詞ハ經津主命健雷命二柱神等予天降

給此荒振神等予神攘く給此神和く給此語問志磐根  
樹立草之片葉毛語止此と有ハ著明リ又正書の  
一云ニ神遂誅邪神及草木石類皆已平云云と見え  
常陸風土記ハ天地權輿草木言語之時自天降神名稱  
布都大神巡行葦原中津之國和平山河荒梗之類云ハ  
と有と上ハ那藝佐昆古神甲斐辨羅神などの傳ハ云  
る事とを考儲經津主神武甕槌神二柱其岐神を郷導  
として山川の荒梗る邪神鬼類を悉ハ和平く給へり  
く時ハ多くハ外國ハ逐却け給へりと見えて磐根樹  
立草の片葉も言止て後ハ初て顯幽の塚を異ハして  
皇國の内ハ然る奇怪く事ハ決く無く成れるを  
後ハ外國より参来れる教法の中幻術共の多く有



△傳十三三十九  
二百五十一引る

て其小交々々々々人共の多在るハ全く外國小廢れ  
残在り者ふり儀式又朝野群載小載れる追儼咒文  
の中小事別天詔久穢久惡疫鬼能村々所々藏里  
隱布留千里之外四方之壞東方陸奥西方遠值嘉南方  
土左北方佐渡與乎知能所乎奈牟多知疫鬼之住加登  
定賜比行賜氏云々御神氣の盛ふりざり當昔  
鴨長明四季物語云く追儼の夜ハ鶯鶯鳥を焼奉り御  
餉の御廻り奉れハ見し物怪疫病却ぬ可し思文書云々出べき事ハ非ずふむ有け  
む廻の授み物檢の牙ハ備進ふ家ハ物敷ふらて殊ハ大内ハ  
ハ掃部寮例として仕奉れり此儼進ふ事ハ唐神傍れ邪魅鬼物を外國小神却給へり  
て我御國ハ神武天皇の六年の春より物為給ふ御事つて思  
しき御例あり云々云々と有ハ實ハ定々御事有る事簡りり又太秦牛祭の祭文  
小田中波安良  
藤乃森嗟嗟乃與奈留一舉打禮天波廳加天宇左以辻

△欽明天皇十三年  
御紀百濟聖明  
佛像備蓋經論  
奉れる小物部尾  
與天連中臣錄子  
連か諫奏られ  
所ハ天皇曰直  
付情願人宿目宿  
祢試令禮祥大臣  
跪受而所悅云々因  
洋捨向原寺者寺  
於後國行疫氣良  
致天殘久而愈多  
不能治瘡有る  
此物ハ來て邪神毒  
鬼ハ詣來ハけり  
其ハ後ハ十の枉  
事禱くハ起れハる  
所を得て其也ハ  
なりハ故あり又

乃道祖神等云々如此異類不道無懺乃奴原仁於天  
波長久遠久根乃國底乃國迄佛退久戸支者也有て  
此ハ右の儼祭文より出たる体ふるを彼詞ハ外國  
小却ふ由ふて尋常の狀小異ふる小就て考ふ可し諸  
一種ふる事講義小己小註り其公敏達天皇十四年御  
紀小蘓我大臣馬子宿祢禮拜石像乞延壽命是時國行  
疫疾民死者衆と有て佛を齋ヲ初たる即疫疾流行ハ  
ハれて國民絶べき小至れるも其妖言と共小渡參來  
れる鬼物の災ふり崇峻天皇五年御紀小馬子宿祢詐  
於群臣曰今日進東國之調乃便使東漢直駒殺于天皇ハ  
有て神代より以來見も聞も及ハぬ大禍事を佛進ト  
る馬子奴と漢戎の畜ふる駒と小成れるも邪神の態

○日本書紀傳十

○二百五十六



△傳十二行廿九  
三十一  
十一丁  
引る

て其小交々々々々人共の多在るハ全く外國小廢れ  
残在り者ふり儀式又朝野群載小載れる追儺咒文  
の中小事別天詔久穢久惡伎疫鬼能村々所々亦藏里  
隱布留千里之外四方之堺東方陸奥西方遠值嘉南方  
土左北方佐渡與乎知能所乎奈牟多知疫鬼之住加登  
定賜比行賜氏云々有ハ神氣の盛ふりざり一當昔  
の人の中々小思寄て云出べき事小ハ非ずふハ有け  
れハ此ハ決て二神の邪神鬼物を外國小神却給へり  
し傳ふハの有て云る者ふりり又太秦牛祭の祭文  
祢土毛箱積行山仁波安良祢止毛榎本槁本木加良之  
藤乃森嵯峨乃奥奈留一舉打禮天波臈加天宇左以辻

△欽明天皇十三年  
御紀百濟聖明が  
佛像蓋蓋經論  
奉れるハ物部尾  
與天連中臣録子  
連ハ諫奏され  
所ハ天皇曰直  
付情願人箱目病  
祢試令禮祥大臣  
跪受而所悦云因  
洋捨向原孫孫等  
於後國行疫疫氣民  
致大残久而愈多  
不能治瘡ハ有る  
此物小無て邪神毒  
鬼ハ詣来ハけりし  
其ハ後ハ十の枉  
事禱ハ不起れハ  
所を得てハ其ハ也  
なりハ故あり又

乃道祖神等云々如此異類不道無懺乃奴原仁於天  
波長久遠久根乃國底乃國迄拂退久戸支者也ハ有て  
此ハ右の儺祭文より出たる体ふるを彼詞ハハ外國  
小却ふ由ふて尋常の狀小異ふる小就て考ふ可ハ儲  
右の追儺も牛祭も道饗祭の其公敏達天皇十四年御  
紀小蘇我大臣馬子宿祢禮拜石像乞延壽命是時國行  
疫疾民死者衆と有て佛を齋ハ初たる即疫疾流行ハ不  
ハれて國民絶べき小至れるも其妖言と共小渡參来  
れる鬼物の災ふり崇峻天皇五年御紀小馬子宿祢詐  
於群臣曰今日進東國之調乃便使東漢直駒殺于天皇ハ  
有て神代より以来見も聞も及ハぬ大禍事を佛進ハ下  
る馬子奴と漢戎の畜ふる駒と小成れるも邪神の態



ふる事云も更ふり其時上宮太子ふど御在る乍も一  
ふハ天皇と坐し一ハ御父と坐る御仇を閑め御在  
しくも世と共ハ人の訝る事ふるハ此も枉神ハ交こ  
おれて現心も御在るしふる可し舒明天皇七年  
御紀ハ瑞蓮生於劔池一莖二花と有ハ上ハ引る欽明  
天皇十三年ハ蘓我稻目が初て佛を崇たる向原寺の  
傍ふれば其佛魔の妖氣を兼たる者ふり皇極天皇四  
年御紀ハ鞍作得志以虎為友學取其術或使枯山變為  
青山或使黃地變為白水種ハ奇術不可殫究と有ふて  
ハ神代ハ一速ふる荒振神の荒びたりハ狀ハ異ふ

ざるハ皆皇國の惟神ふる事ハ因れるハ非ず皆外  
國より出來りハ事ふるを思ふ可し大凡西蕃の道士  
ハ云者天竺の法師と云者ハ更ふり外夷ハ種々の  
邪法邪教の有て人を令惑て其門を弘め其徒を衆く  
為るハ多く幻術を以て先愚人よりして引入るハ  
神代ハ經津主神武甕槌神ハ神掃ハ掃ハれ神逐ハ逐  
れたりハ邪神毒鬼の所行ハふむ有けるを追てハ外  
國より渡來れる書典ハ在れ器財ハ在れ其ハ乘來り  
て人心の漸其ハ移るハ閑隙隙より相牽り入ハが有け  
る林道春ハ神社考ハ我邦自古稱天狗者多矣皆靈鬼  
之較著者是非星之義或為佛菩薩相為鬼神歟時

○日本書紀傳十

○二百五十七



出現或爲狐或爲鳩飛行或爲童或爲僧爲山伏出千人  
間或見人福則轉爲福過世治則復爲乱或發火災或起  
關聞諍沙門之有慢心及怨怒者多人天狗之中所謂弘法  
傳教慈覺智證等是也有息長天狗云者ハ外國の妖  
言を信たたり者の成故足息長姫尊の御代より被行  
たりけむ臨時祭式ハ唐客入京路次神祭と云事有り  
此ハ治省式ハ凡新羅客人來朝者給神酒と見えたる  
事小て玄審察式ハ依ハ彼征韓の時小由緒坐す神社  
ハ幣帛を奉り其神酒を令賜る祭ふるも外蕃より送  
神ふとの託たりむハ其神威を令畏て却給ハむと  
ふる可し其ハ其次ハ蕃客送迎坂神祭云ハ右蕃客入朝  
迎畿内坂祭却送神其客徒等比至京城給袂麻令除乃

入て見えて蕃客の入朝其時ハ先畿内の坂小迎て  
其坂神を祭りて彼送神を追却オヒヤラ給ハ猶其上小も京  
城小至る比ハむハ袂麻を令賜る御政小て深く彼  
送神を忌避給ミコロシテ御用心ふる御事ふるを見て知べき  
者ふり又障神祭云ハ右客等入京前二日京城四隅爲  
障神祭と有ハ四時祭式ハ道饗祭於京城四隅祭と見  
えたる其小て障神とハ彼詞小大ハ衢ハ湯津磐村之  
如久塞坐皇神等と有る三柱神を申せる事云も更ふ  
り此神を被祭る事ハ彼天降降臨章第二一書ハ故經  
津主神以岐神爲郷導周流削平と有る本の所由小依



れる者ふる事を明く可し然れハ時置師神以下の  
 九神ハも經津主武甕槌神ハ神逐ハれ奉りしより  
 外蠻ハ癩ふれ行けむ事灼然き者ふり能く神代の古  
 説ト當今の事實トハ微く考ふ可き者ふりし  
此ハ  
 不長説ト爲て有けり然れども予ガ思ふ千重の一重  
 も猶盡ハハる心ちふむ爲るを己ハも大殿祭御門祭  
 道饗祭遷却宗神遣唐使時奉幣等の詞共の下ハ條  
 云るを此ハ云ずしてハ事意を盡さばるガ故ハ止  
 事を得ず  
 ○又投其履久都ハ万葉五ハ小宇既具都遠  
 奴伎都流其等久九三丁十小履乎谷不著雖行ふハ有り  
 和名抄履襪類ハ履草曰扉麻曰履草曰履和名並久豆  
 有れハ字ハ拘ハゞ久都ふるふり當時革ふゞを

以て未製する可ハ非るを思ふ可く太神宮式御裝束  
 の中ハ錦履二面長九寸五分 錦襪八面長九寸五分 有  
 り和名抄ハ襪足衣也和名之太久頭ハ有を始として  
 其久都ト云名多り通證ハ今按履屑也最著下ハ  
 有れども屑ト云も心得ず若くハ  
 口著ハて口より踏入る心ふるハ  
 ○千敷神ハ借字ハ  
ナシキ  
 道及ふり儲此ハ古事記ハ故号其伊邪那美命謂黃  
 泉津大神亦云以其追斯伎斯而号道敷大神ト見え  
 ねハ此ハ千敷神トて出たるハ傳の誤ふる可く又道  
 敷大神ト云名も尋常の神ハ大神ト申すまゞ事ハ  
 ねハ其方ふむ正しく聞えたりける其ハ此一書ハ伊  
 弉諾尊追伊弉册尊入於黃泉及之共語云々ト有る如



くハ伊弉册尊の逃歸給ふ所ハ後則伊弉册尊亦自  
来追マ有テ泉津平坂ハ追及ラセ給ヒ其ハ就テ絶妻  
之誓言の御事有テ種々の御契約共の有ツル其即二神  
の共言ハ給へる結めふる故ハ道敷大神ハ称奉れ  
る御名の有ハふる可此ハ古史徴ハ神代紀ハ  
開嚙神の次ハ又投其履是謂  
ニ數神ハ有ハ伊弉那美命を道敷大神ハ申テ御名の  
紛れたるふり古事記ハ此神の無き正ト云レ  
タ○其於泉津平坂所塞磐石是謂泉門塞大神亦名道  
返大神矣ハ續ける文ふるを坂ト所との間ハ二十五  
字の加文有テ本文ハ混れられハ削去テ心得べし古  
事記ハ此を亦所塞其黄泉坂之石者号道反大神亦謂

△所塞磐石以下  
十九字を其於泉  
津平坂より續け  
られハ古ハ  
必然有テ事決テ  
を其下ハ至テ或  
所謂云ハの二十  
五字此

△故今類史ハ校  
て改む

塞坐黄泉戸大神ハ有ト同ト續ふるを以テ其ハ撰者  
の所爲るゝざる事を曉る可ハ類聚國史ハ御紀を其  
仕出されたる者ふるハ其ハ如ク有れハ其ハ  
りハ以テ前ハ誰ハ漢意ふりハ人の然る謬解ハ書入  
たりつる文の有けむを後ハ寫すト何の心も無く  
書續ける本の有けむ其祖本ト成テ終ハ後世  
の惑ハ種ハ成れりける者ふる有ける此本文  
の續け  
様をも知ズ又類史ハ正ト右の如ク有をも知ズ  
して或者の云る説ふハ云ふも足ざる事ふる次  
ハ少辨ハハ○或所謂泉津平坂者不復別有處所但臨  
死氣絶之際是之謂歟ト云二十五字上ふる其於泉津



平坂と所塞磐石云々の間小在ハ甚々禍くも文  
 かり類史ハ亦名道返大神矣の下小在れども記傳  
 六十三小此ハ小賢くも人の書加へたる文小て云ハ  
 足ぬ事ふり縦ひ撰者の言ふも有れ謂歟と疑へれば  
 古傳ハ非ず己ガ推度ふる事明くけし然るを世の  
 學者等の一向如是る意を悦びて猶様々の空理を説  
 ハ皆煩さき漢籍の僻ふりマ云れつるハ然る説ふり  
 思ふ小撰者の文小てハ有べくもござるふり若撰者小  
 然る意有むハ漢ハ佛ハ無き黄泉國の事實を  
 如此く書續けたる上小猶第九第十等の一書小迄懇

△後の良海本を見  
 九ハ此文を其黄  
 泉津平坂言死  
 出山或所謂泉  
 津平坂者之不  
 復別有祖師  
 云臨死氣絶之  
 際是謂歟有々  
 去して古ハけ  
 ると其文を  
 引直して今ハ  
 如く書改めつ  
 るをけり祖  
 師云と云ハ三言  
 死出と云ハ僧徒  
 の書入あり者  
 なる証ナリ  
 けり其本を  
 見て眞ハ古ハ  
 中の事あらぬ  
 事を曉りて大  
 心ある安ん成  
 れりけり又

到小記さる可くも非るを然委しく物爲りれたる上  
 小謂歟ふで疑を存さる可きふらぬを思ふ可し何れ  
 ても後人の狡意ふり撰者ハカめて撰漢文ハこころハ  
 書ハけりけり古を深く信りけり故ハ斯る事迄ハ  
 漏れ給ハ古ハ舊事紀黄泉段の終小祇書して如今世人  
 者をや  
 所忌先於婦死夫避葦處蓋縁斯歟凡厥所謂泉津平坂  
 者不復別有處所但臨氣絶之際謂斯之歟謂出雲國伊  
 賦夜坂と有て何の事とも得知れぬ事を加へて有り  
 若くハ其紀を撰りし人の情進ハ然思寄て書記たり  
 けむを同心小諾ふ輩ふどの有て御記の傍ハ書入  
 たるが本文の如く混れ入たりし者ふり故云々の同



ト二十五字の文ふらふ御紀と類史と位置を別  
爲る以て撰者の文ふらふ事知れ又後人の書  
りし故本文混ひ入も其處の各相異れる者不  
る事決くふむ有ける右の如今世人所云くハ伊弉  
冊尊を奉奉れりと思惑へる僻事ふり次ハ凡厥所謂  
云ハ崩御りて心得たる誤ふれば共ハ古意ハ皆  
る私事ふり次謂出雲國伊賦夜坂ハ古事記を取れる  
ふらむを下ハ歟字脱たる可し或者鈴屋大人の此正  
り世の愚人を欺りむの下構ハ諸家の説を盜襲  
て一書を作れる其中ハ舊事記一本ハ氣絶之後謂斯  
之歟謂出雲國伊賦夜坂者唯辭耳と有る此を以て彼  
醉ハ醒しつ可し又此文ハ依ハ此紀の今本共ハ氣絶

之際と有る際字ハ後の誤ハ奴ガ妄作の一本ハ可  
者唯辭耳と云四字を補ひて渠ガ神代の古傳説を推  
言談辭と云消む口突と成てる者ふり又際を後の誤  
と云も私説ふりて雖も其書ハ出雲尊孫國造の序を  
こハ添たるが世ハ被行ハ故ハ今庸人の爲ハ少クハ  
ハ置者ふり正ハ直ハ此大御學ハ仕奉る人ハ少クハ  
如何ハ浅キ人ハ此頃阿米利加ハ云ハ醜國ハ睦む可  
頻ハ蠻夷の風を愛て其手振をさハハ美ハ擬ハ計ハ  
ガ故ハ其事を合せて云ふり○不復有處所ハ何の  
事ハ上ハ後則伊弉冊尊亦自追是時伊弉諾尊已到泉  
津平坂と有ハ別ハ泉津平坂と云ハ處所有ハ非ずヤ  
又以千人所引磐石塞其坂路と云ハ又其於泉津平坂  
所塞磐石是謂泉門塞大神と有ハ皆別ハ處所有

余て然る邪神ハ  
相交り相口會た  
る此車の爲ハ被障  
神等の出現ハ  
御在ハ坐て外國の  
追備ふらハ又ハ昔ハ  
泉國ハ神遊ハハハ  
ハ掛まハハ甚ハ  
可畏ハ皇大神國の  
大神稜威ハハ  
加ハ奉ハ可ハ時  
缺ハ



其處所不<sub>レ</sub>就て有<sub>レ</sub>事共ふり此を以て此ハ撰者の文  
不<sub>レ</sub>非ずと予が受張て云る所由是ふり又古事記不<sub>レ</sub>故  
其所謂苗泉比良坂者今謂出雲國之伊賦夜坂也と有  
ふぞハ正しく其泉津平坂の入口ふりし事上小説る  
を以知べし然れども今何れウ入口ふりしと云事今  
其地不<sub>レ</sub>於ても詳ふらざるハ彼風土記不<sub>レ</sub>も所見たる  
如く其後ハ八束水臣津野命の御言ハ雲立出雲國  
者狹布之堆國在哉初國不<sub>レ</sub>所作故將作縫詔而有<sub>レ</sub>如  
二神の初國作<sub>レ</sub>せり一程ハ狹布の如く細く長く小  
ヨ國ふりけし然るを其神の國引ふ引来寄せて縫

足ハ一坐し故不<sub>レ</sub>今の出雲國とハ成れざるを今者國引  
詔詔而意宇杜御杖衝立云々と有る意宇杜ハ郡家東  
北邊田中在壑是也と有るを其伊賦夜坂の在る筑陽郷  
ハ風土記不<sub>レ</sub>餘戸里郡家正東六里二百六十歩と有る  
其地ふれバ古不<sub>レ</sub>國引坐し時の事ハ其地<sup>邊迄</sup>も係  
づゝへる事灼然ければ其地形不<sub>レ</sub>も己不<sub>レ</sub>異有るが故  
不<sub>レ</sub>彼記不<sub>レ</sub>ハ伊賦夜坂の故事ふぞハ記ご<sub>レ</sub>して唯伊  
布夜社ふぞの如く現在ふる耳を書れたりし者之所  
見たり然れバ其坂不<sub>レ</sub>就て其穴の所在ふぞを求探る  
不<sub>レ</sub>此耳<sup>不<sub>レ</sub>其後</sup>不<sub>レ</sub>其後不<sub>レ</sub>大己貴女御神の國土經營の時不<sub>レ</sub>又

○日本書紀傳十

○二百六十三



更ニ地形の大小異ニ成れるも多在ニ纂疏ニ泉津平坂  
ぬ可レけれハ漫ニ強事為レまりきニかり  
正謂ニ生死之關臨ニ死氣絶ニ之際是也ト説ニて給ニへるニふニで  
ハ神代の古傳を謂ニゆるニ寓言の如ク説ニ曲ニせ給ニへる  
者ニふニて甚ニ味氣無ニ釋紀不須也凶目汚穢之國の下  
小私記曰問是何國哉答是則黃泉之國也以其在地下  
可レ甚汚穢故得此名也又問今如上下文次者凡行泉國  
者必是自行不知今世死者身留而魂行者也然則始自  
何世如今死者乎答此事甚難知者也蓋神人頗與人異  
也未レ心具説ニ有ハ然ニすがニ古人の説ニふニて甚ニ愛ニたニく  
此を以思ニふニ此私記の頃ニハ未ニ此ニふるニ或所謂以下

の傍書挽入ハ未有ニごりニ事灼然ニ此を以ても撰者  
の文ニも非ニず又代私記の頃ニも其説の無りニ事ニを今  
知ニ不足ニれりト謂ニつ可ニき者ニかりニぐニ但レ釋紀を書ニれニし  
加ニへたる本も有ニけめニも多ニく私記の文ニと師説ニを  
を立ニたる書ニふる故ニ別ニ小其論説ニハ出ニさニざニりニ者ニマ  
見えたり此を以て愈後人の情進ニふニりニ事ニ知ニらニるニを  
現ニ世ニハ長存ニハ居ニて予ニガ此世人数百年の惑ニを説ニくニを  
見聞ニざる事ニを遺憾ニしく思ニふニ但レ黄泉神ニハ交ニこ  
り居ニ猶ニ懲ニずニ小搔ニ晚ニさニむニ爲ニるニも知ニべニくニ掛  
まくも可ニ畏ニきニ皇大御典の古傳ニハ雅語談辞ニふニ云目  
を設ニけ私説ニを牽強ニも彼邪神鬼類ニハ交ニりニ○氣絶ニ之際  
こニれニ竟ニて現心ニも無ニきニ痴者ニふニれニハニふニりニ○氣絶ニ之際  
ハ死ニる程ニを云ニふニり死ニを斯奴ニと云ニハ息ニ吞ニの義ニふる事  
己ニ上ニふる級長戸邊命の傳又當縮殺殺汝所治國民



日將千頭の下云云如一萬葉九十九小由奈々  
波氣左倍絶而後遂壽死邪流とも有れハ氣絶云語  
ハ有れども此の御事實小當りて氣絶ふ云事  
ハ且ても無し事ふる事右小委しく辨へた如  
く又実小氣絶て崩御たびハ其と直て指附て  
云方甚簡易して文も解安く事も知安きを態と然  
る迂遠事を撰者の何どうハ物爲給ふ可何代の  
誰ヤ一人然る禍事ハ書入たりけび実小  
人惑ハ一の妖言と云ハ是ふる者ふり  
臨死絶氣之際  
を泉津平坂と  
云ハ此ふる所塞磐石若ふい喉小石ふでを以て塞  
ぎしと云む若男神の然爲給ふと爲ハ不仁の甚し

事と云ハまく甚  
心行め説ふりけり○所塞磐石ハ佐夜禮理斯伊波  
て訓べし上小故便以千人所引磐石塞其坂路と有を  
兼たる所ふり古事記も上小引塞其黄泉比良坂と  
有を其を兼て下小亦所塞其黄泉坂之石者云くと有  
て此と相同一記傳六三丁小始ふるハ是を以て塞給  
ふ伊邪那岐神と訓べく後ふるハ其所塞れる石小就  
て云ふれば佐波理とく佐夜理とく云べき格ふり同  
言も人の爲と自然との差有り借佐波理を佐夜理  
とハ白檮原宮段歌小志藝波佐夜良受云々久治良佐  
夜流万葉五二丁小奈尔可佐夜禮留又三丁許良尔佐



△二百七十云  
少見合す可

夜利奴ふぞ有りて云れたる小従へる者ふり故思ふ  
を佐夜（真）と云も障の義ふる可く刀ふぞ小鞆と云も  
双を障る意ふて亦同語ふる可く小借亦小所塞を布佐  
賀流と有ハ○泉門塞大神ハ右の坂路小塞給へる千  
人所引磐石の大神と成給へる小て彼（斬）軻遇突智神  
を斬給へりし十握劔の後小稜威雄走神と成給へる  
小同ト借此神名古事記ハ塞坐黄泉戸大神と有を  
記傳ハ佐夜理坐黄泉戸之大神と訓べし此ハ其所塞  
る石小就たる神名ふれば佐夜理と訓て自然方小  
爲べし延佳ガ黄泉戸迹塞坐と訓るハ書紀ハ泉門塞  
大神と有小依ふれと神名を逆小反て訓べく書る例

無れば非ふり葺不合（命）ハ自然如此書べき文字ふれ  
バ云難し意と有り実小然る言ふり但古事記ハ右  
ハ字を換て泉門塞大神と書れたるハ古より二方小  
傳ハれりふり古事記ハ黄泉戸塞坐大神と書る可  
く御紀ハ塞泉門大神と書べしを外して右の如く  
ふりハ塞坐黄泉戸大神と泉門塞大神とも申せり  
し故然れば此ハ泉門佐夜理之大神とも訓べけれ  
も猶泉門佐閑之大神と訓べし大字を略けハ泉門之  
塞神と云むが如し右の泉門ハ黄泉國小入門小て泉  
津平坂ふる事云も更ふり上二百九十小塞其坂路と有  
る如く彼平坂ハ頸國との坂合ふる門口ふり借此の  
塞を佐閑と訓むハ此の岐神を也第九一書ハ来（ナ）各



△又七小水底之玉障  
清有正佐開  
と訓あり又

戸之祖神と見え四時祭式小道饗祭於京城四隅祭  
有を臨時祭式小障神祭と所見たり和名抄小道祖  
岐神道神ふど並べて道祖和名佐倍乃加美と所見た  
る是ふり若て佐夜理と云時ハ夜行小活けるを佐開  
と云時ハ波行小活ける事ハ報を牟久由と云へバ夜  
行牟久布と云へバ波行小活くと同ト例ふり天武天  
皇御紀小發美濃師三千人得塞不破道又万葉十三  
丁ハ風吹者浪之塞海道者不行と有る塞も佐夜禮流  
と訓べき所ふり又右の障神の障をも万葉一  
と訓ハ佐開と訓べき事云も更ふり万葉十一小早  
敷哉誰障鴨又湊入之葦別小舟障多見十二小彼所將

障吾尔不有國又葦別小舟障多ふで佐波理と訓と十  
三小高山麻障所為而と有る其ハ開陀氏と訓ふり  
皆此の塞字名義抄小布佐具又加久留又能夫又開陀  
都又美氏理又曾古と訓り和名抄林野類小野王案  
塞險惡之處所以障内外和名曾古と有り此の泉門塞  
大神の塞と顯國と泉國と内外を隔るふんハ克合り  
諸塞神と云ハ彼千人所引磐石を以て黄泉坂小障へ  
塞ぎし意ふるが其より以來顯國小て福事を為せる  
邪神ハ譬此土小在も彼國の属ふる故小此大神と岐  
神と二柱ハ何方迄も其を障留給ふ御功坐る事彼道  
饗祭詞小大八衢尔湯津磐村之如久塞坐皇神等之前  
申久八衢比古八衢比賣久那斗止御名者申氏辞竟  
奉波と有を以知べし御門祭詞小櫛磐間命豊磐

○泉書紀傳十

○二百六十七



牖命登御名乎申事波四方内外御門如湯津磐村久  
 塞坐サカミシ云々御門神の御門を塞給ふ御事を塞坐サカミスと  
 有も塞神の塞サカミふ同ト意ふり又姓氏録左京神大伴  
 宿祢條雄略天皇御世以天靱負賜天連公奏曰衛門  
 開闔之務於職甚重若一身難堪與愚兒語相併奉衛左  
 右勅依奏是大伴佐伯二氏掌左右開闔之縁也と有る  
 其より佐伯宿祢と云も出来ふ御門を衛奉れる事と  
 成れるが其佐伯ハ塞君サカミキの意ふる事右の御門祭詞を  
 以て知べく又此の泉門塞大神と申も泉門を衛る塞  
 神ふる事をも知べき者ふり古事記ハ於是天之日乃  
聞其妻道乃追渡來將到

難波之間其渡之神塞以不入故更還泊多達摩國と有  
 ハ難波の水門を塞たるふり此等も此の塞神の例と  
 べし斯れハ塞神と申すハ右ハ引る來名戸之祖神と  
 云も有を以て思ふ小此泉門塞大神と岐神と御力を  
 合せて坐事右の道饗食祭詞ハ見えたる如くふれハ其  
 二神小且る御名ふりけり又彼詞と此の所塞磐石是  
 謂泉門塞大神とを合せてハ衢比古ハ衢比賣と申す  
 ハ其大神の男女ニ柱小分れ坐て大伴佐伯の左右小  
 立て御門を衛奉るが如く其泉門を塞て守給ふ御名  
 ふる事灼然く其上ハ岐神の御力を添御在り坐す事  
 ハ大伴佐伯ハ相並びて物部氏の矛楯を豎て威儀を



嚴コ為テ仕奉ル狀コ等シ可ク然レ古史  
徵コ八衢比古八衢比賣云ハ彼豫美戸コ塞坐テ道  
返大神コ事疑ム云レて古史成文コ其亦名コ  
定め記サれたルハ実コ相應ヒたる説コる者コり然  
るコ古事記コ次於テ殺棄御禪所成神名道侯神コ有コ  
其傳コ彼道郷祭詞コ謂ユる八衢比古八衢比賣ハ此  
神コ可ク一神コ比古比賣分テも申シ又其二神  
を合セても申ス例多シと云レたルハ然スがコ鈴屋  
大人ノ説コて実コ然ル言コハ有レども其傳ノ誤コ  
る事コを見出シれザりつルハ遺憾シ事コかりシハ其

此コハ又投テ其禪是謂問靈神コ有ル其正説コる事コ已  
上コ註セるが如ク思フ禪ハ股ノ分レたル物コ不  
誤傳ヘ者コ可ク故右引ル臨時祭式コ障神  
祭コ云テ其記ル所ハ例ハ道郷祭コ同シを以テ詞  
謂ユる八衢比古八衢比賣久那斗神三柱共コ押括  
めテ障神コ申セる上ハ此ノ泉門塞大神コ予ガ始テ  
泉門佐閑之大神コ訓ルも強事コハ非ル事右の如ク  
障神コ下コ附云例ハ彼来名戸之祖神コハ限ズ岐  
神コも岐障神コ申ス可ク事拾苴抄コ載タる問タ食  
歌コ布那斗佐閑由布那能迦微と有コを以テ曉ル可ク  
諸此神コ大神コ申シ亦名コも然シ添タるハ殊コ



△上三丁岐神の下  
ふ引了神名式河  
内國大縣郡石神  
社寺世城地神社  
相並給へるを思ふ  
可

黄泉國より疎び麓び来る鬼神をも物とも所思さず  
追却け給ふ可畏き神威坐る大神小坐るが故ふり並  
この神小ハ大神と稱しれざる御記の例ふるを思ふ  
可行此此大神を道路小祭る小ハ必石を立て祀る例  
ふるハ右の黄泉坂小塞れりし千人所引磐石の神靈  
小坐故ふり然れば彼道饗祭を於京城四隅祭と有も  
石を建てて被祭けし其名残と見えて山城志小道  
祖神祠有三一在幸神町盛衰記所謂賀茂河原西一條  
北出雲路道祖神即此一在上御靈前一在五條南西洞  
院東見拾芥抄及宇治拾遺と有る其出雲路道祖神ハ

京城の東北隅小當れるを其神體ハ石神ふるふむ諸  
國の状小異ふごりければ云ふり又石神祠有二一  
在葭屋町六角南相傳昔在冷泉院稱中山大明神或曰  
俱櫛石窓命豊石窓命即此と有も道祖神依て附會せ  
可説ふる可一京大坂ふで今過石小地藏と云ふ鬼  
の像を置ハ思い事ふ今上古の道祖神の名残  
ふる可一予經歴せ諸國の中ハ五畿内ハてハ右の  
鬼多く伊勢ふてハ山神と云り此ハ山の神ハ非ず岐  
神ハ右の三柱ふる故小三神の音ハ山神の音ハ同ト  
き故小誤れふる鈴屋翁神并詞ハ坊字守給布山  
神大神と有る是ハ彼國ハ馬頭觀音ハ石小彫附ハ信  
彫附ハ野ハ東海道ハ神ハ有り陸奥出羽ハ羽黒山  
濃上野ハ道祖神ハ有り其ハ伊勢ハ山神の例  
湯殿山月山の名を刻ハ有り其ハ伊勢ハ山神の例  
小て三神を山神と書ハ有り其ハ伊勢ハ山神の例  
の名を記ハ事ハ成ハれハり又庚申塚ハ云も多し其  
を猿田彦神を岐神と心得ハるハり

○日本書紀傳十

○二百七十



△也の下は良海奉  
の五字有り去  
來ハ由伎伎と割  
べくして謂ゆる  
往來神の義  
申す御名

根を梵天と云て祭れるも多し其ハ佛ハ謂ハ庚申ハ  
帝釋天王ふりと云るハ其縁を以て然爲るふり又  
關東ハてハ道陸神と云り其ハより轉ハて弟六天と云  
り此を天神弟七代面足尊ハ根尊ハも又ハ佛ハ謂ハゆ  
る弟六天の魔王ハて謂ハゆる梵天の事ふりふと云ハ  
巫祝僧徒の妄談ふり予昨年西國ハ行たりハ安藝周  
防ハふて云てハ道祖神と云て石を建たり肥前ハてハ  
戎神と云て俗ハ云ふ戎像を石ハ刻ハて過ハて立た  
り予が淡路ふて云てハ正しく佐閑能神と申せり又  
國ハくハ八幡宮ハ王子社とて多ハ在るハ大方此ハ禰神ハ  
り始りたりと思しき多ハく又天王社と云も疫神ハ  
云方より混れ又天神社と云も女彦名命を午間天神  
と云るハ疫神ハも其神の事と心得て祀れるも多ハ在り  
ぬ可し左ハ右ハ國ハくハ石神の多ハ在るハ皆此道祖神  
より出たる者ハて數ハ〇道返大神と申すハ上ハ得後  
則伊弉册尊亦自来追ハ見え又古事記ハ故ハ其伊弉那  
美神云ハ亦云以其追斯伎斯而号道敷大神ハ有る如

△大同類聚方道  
及於樂筑前國安曇  
連等之方元伊弉  
諾尊傳之云事  
見也

△廿九卷無耶加敵利病の所より胎返乃藥坂上大神ハ村ハ神ハ名ハふハの謂ハハ  
麻呂妻ハ不ハ忍ハ神ハ道ハ返ハ神ハ之ハ事ハ中ハとハ有ハ更ハふりハハハ別ハ不ハ一ハ神ハとハ成

く其道敷大神の追及ハ給へる時ハ千人所引磐石を  
其黄泉門ハ塞ハて却ハし奉れる御功を以て祢奉れる御  
名ハふるハ女神ハ道敷大神と申せるハ對ハて道返大  
神ハと申せるを以思ふハ此ハハ男神の御靈ハの疑ハて成坐  
坐るハ本名を泉門塞大神と申すハ天神本記饒速日命  
其亦名をハも然祢申せる者ふりハ天神本記饒速日命  
の天降れる時ハ天神御祖詔授天璽瑞宝十種謂ハ羸都  
鏡一邊都鏡一八握劔一生玉一死反玉一道及玉一蛇  
比禮一蜂比禮一品物比禮一是也天神御祖教詔曰若  
有痛處者令茲十宝謂一二三四五六七八九十而布瑠



△也の下ハ良海奉  
ハハ亦名去來神  
の五字有り去  
來ハ由伎伎と訓  
べりて謂ゆる  
往來神の義ハ  
うけれハ亦名  
て允當れハ備  
此道及大神と  
申す御名

根を梵天と云て祭れるも多し其ハ佛と謂ゆる庚申ハ  
帝釋天王ふりと云るも其縁を以て然爲るなり又  
關東にてハ道陸神と云り其より轉じて第六天と云  
り此を天神第七代面足尊根尊とも又ハ佛と謂ゆ  
る第六天の魔王とて謂ゆる梵天の事なりふと云ハ  
巫祝僧徒の妄談ふり予昨年西國へ行たり安藝周  
防ふて云てハ道祖神と云て石を建たり肥前ふてハ  
戎神と云て俗云ふ戎像を石に刻いて過と云立た  
り予が淡路ふて云てハ正しく佐間能神と申せり又  
國々ハ八幡宮ハ王子社とて多在るハ大方此禰神よ  
り始りたりと思ふべきが多く又天王社と云も疫神と  
云方より混れ又天神社と云も女彦名命を午間天神  
と云々ハ疫神も其神の事と心得て祀れるも多あり  
ぬ可し左ハ右ハ國々ハ石神の多在るハ皆此道祖神  
より出たる者なり○道返大神と申すハ上ハ得後  
知ず多ある神祠なり  
則伊弉册尊亦自来追々見え又古事記ハ故其伊弉那  
美神云々亦云以其追斯伎斯而号道敷大神と有る如

神道類聚卷之十  
大神類聚卷之十  
大神類聚卷之十

△大同類聚方本道  
及本類聚前國安曇  
連等之方元伊弉  
諾尊傳方本道  
見也

く其道敷大神の追及り給へる時ハ千人所引磐石を  
其黄泉門ハ塞て却し奉れる御功を以て祢奉れる御  
名ふるが女神ハ道敷大神と申せるハ對へて道返大  
神と申せるを以思ふハ此ハ男神の御靈の凝て成坐  
る大神ハ坐す事申すも更ふりハ但亦御名ふとの謂ハ  
坐るが本名を泉門塞大神と申すハ天神本紀饒速日命  
其亦名をしも然祢申せる者なり△天神本紀饒速日命  
の天降れる時ハ天神御祖詔授天璽瑞宝十種謂贏都  
鏡一邊都鏡一八握劔一生玉一死反玉一道及玉一蛇  
比禮一蜂比禮一品物比禮一是也天神御祖教詔曰若  
有痛處者令茲十宝謂一二三四五六七八九十而布瑠



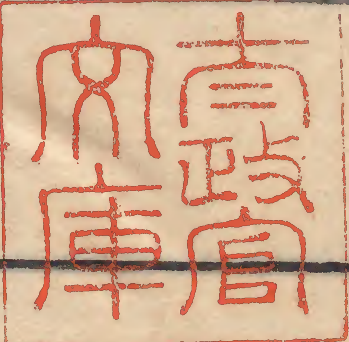
部由良々止布瑠部如此為之者死人返生矣と見え  
 たる十種神室の中ふる道反玉死反玉ハしも決く此  
 道返大神の御靈形ハころハ有けめ其ハ若有痛處者  
 ハ有病處者々云むが如く下小死人返生矣と有れハ  
 かり偕人身の病ハしも己小説たる如く時置師神煩  
 神閔嚙神と云ふ泉下小属る疫神の所為ふるが故小  
 道反玉をしも振る時ハ然る疫神の類ハ悉小逐却ハ  
 れ奉る事ふるが故小天神の其式を授傳給へりし者  
 かり又死反玉も然り人の死る事ハしも己小伊弉  
 册尊の當<sup>ニ</sup>緘殺汝所治國民日將千頭と申給へる如く

黄泉津大神の御心小て黄泉神の所為小し有ければ  
 其玉を振る時ハ彼醜國の邪神ハ去除こる故小死れ  
 るも返り生べき理かり然れば此ニハ決く此ふる道  
 返大神の御靈形小む有ける前小ハ四時祭式鎮魂  
 魂生魂足魂留魂大宮女御膳魂辞代主大直神一屋  
 と有て合せて九神ふれども大直神ハ神直日神と  
 並給へる神ふれハ合せて十神ふれハ彼生玉足玉を  
 生魂足魂神の御形と見れハ其十神の御形ハ孫降臨章弟  
 思へりし高皇產靈尊因<sup>ニ</sup>勅曰吾則起樹天津神籬及天  
 津磐境為吾孫奉齋矣云々と有て己小其時小定れハ  
 ハ殊更小降し給ふ可<sup>ニ</sup>あ<sup>ニ</sup>ず又蛇此礼蜂比礼ふでハ  
 大國主神の用給へる器ふるを國避の時小天神奉  
 給ひしを又天降し給へる器ふるを國避の時小天神奉  
 宝を十神小配し事ハ強事かり唯鎮然れば此道反玉  
 魂祭小振奉る術小用る宝ふりけり然れば此道反玉

○日本書紀傳十

○二百七十二





死及玉ふどハ彼天孫降臨章ふる岐神の御形候の廣  
 矛の時ハ共ハ被獻々々を廣クハ古語拾遺ハ玉自從  
 有れば御天降の時ハ持降り給へるを十種神宝ハ  
 追て後ハ饒速日命を以て天孫ハ令獻給へりハ  
 けり彼道饗祭ハ元より國土ハ大國主神の行給へ  
 りハ神事ふるを今度ハ天神の御許より事任し給へ  
 るふり其詞ハ高天原ハ事始ハ皇御孫之命止 祢辞竟  
 奉と有を以知べきふり 其ハ高天原ハ天神御祖の  
事始給へる御政事を受賜り  
 傳へて今皇御孫之命の御言以て 祢辞竟奉るとふり  
 其結ハ平久齋給部止神官天津祝詞乃太祝詞事乎以  
 氏祢辞竟奉止甲と有を以知べし  
 委くくハ祝詞講義ハ云り見べし



